

観光研究の主要概念

— “Key Concepts in Tourist Studies” 抄訳

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 小槻文洋

神戸夙川学院大学観光文化学部准教授 原 一樹

神戸夙川学院大学観光文化学部講師 伊多波宗周

【目次】

はじめに

抄訳（原著登場順）

〔アート・ツーリズム〕

〔文化ツーリズム〕

〔ダーク・ツーリズム〕

〔エコツーリズム〕

〔倫理的ツーリズム〕

〔e-ツーリズム〕

〔映画&TV ツーリズム〕

〔アイデンティティ〕

〔先住民ツーリズム〕

〔文学ツーリズム〕

〔モビリティ〕

〔新植民地主義〕

〔ポスト・ツーリズム〕

〔宗教的・精神的ツーリズム〕

〔ルーラル・ツーリズム〕

〔持続可能なツーリズム〕

1 はじめに

本稿は “Key Concepts in Tourist Studies”

(Melanie Smith, Nicola Macleod, Margaret Hart Robertson, SAGE, 2010) の抄訳である。原著はツーリズムに関する諸概念や様々なツーリズム形態に関する 40 項目の解説から成り、最新の研

究動向をうかがうための読書案内等も付随する有益な書物である。日本語で読める類書が少ない点に鑑み、翻訳者チームの研究・教育への活用を念頭に置きつつ翻訳項目を選定し、注を適宜付しつつ訳出した。

訳出にあたって、長谷政弘編（1997）『観光学辞典』同文館出版、香川眞編（2007）『観光学大事典』木楽舎を適宜参照したが、既訳が存在してもあえて原音カタカナ表記を採用した場合もある。

たとえば、**tourism** は「観光」という定訳が存在するが、本訳では基本的に「ツーリズム」と訳している。玉村和彦は、長谷編『観光学辞典』の「**tourism** 観光」の項目で、これを

自由時間における日常生活圏外への移動を伴った生活の変化に対する欲求から生ずる一連の行動

と定義し、そのうえで

この定義はややもすると観光を観光客の一方的な行動形態として平板にとらえがちであるが…「一連の行動」を観光客が訪問する地の人々との海田の諸藩の関係を含むものとして、ダイナミックに捉える必要がある。

と補足している。この「ダイナミックな」あり方を表現するには、限定された意味で受け止められがちな「観光」の語よりも、「ツーリズム」の語の方が適切だと今回は考えた。

また、tourist には、香川眞が前掲長谷編で「観光者」の訳語をあて以下の説明を加えている。

観光行動あるいは観光行為の主体を一般に観光者という。特に観光事業、観光関連事業の客とみるときに観光客の用語を用いる。類似の用語に旅行者があるが、厳密に区分するなら、旅行者、その一部としての観光者、さらにその一部の観光客、と捉えたい。旅行者と観光者の違いは、それが楽しみを求めての余暇としての旅行である稼働に依存する。

この「観光者」という訳語や「旅行者」、「観光客」の区別はよく考えられているが、現在のところ日本語に定着していない（定着させるには誰かが使い続けるしかないのだが）ことから今回は「ツーリスト」としたことが多い。

同様の判断から、頻出する attraction, destination, site, visitor といった単語についても、登場する文脈に従い、適宜訳し分けている点も申し添えておく。

2 抄訳

【アート・ツーリズム (Arts Tourism)】

アート・ツーリズムは、オペラ・バレエ・音楽祭・芸術祭など、舞台芸術・視覚芸術への関心にもとづく旅行のことである。

アート・ツーリズムは、文化ツーリズム (cultural tourism) および遺産ツーリズム (heritage tourism) の一部であり、特別関心ツーリズム (special interest tourism) と密接な関係にある。芸術は、16 世紀の初期グランド・ツーリストたち (Grand Tourists) (*訳注1) 以来ずっと、旅行の主要な動機の一つだった。彼らは、ヨーロッパにあった劇場・オペラハウス・コンサートホール・芸術祭を経験しようと旅したのだった。上演もさることながら、それが行われる建物もまた、

人々をひきつけるもので、今日なお、そういった場所が、アート・ツーリズムの旅程における基礎部分を形成している。芸術施設への訪問は、ごく一般的な余暇活動の一つであるし、次のような場所への訪問こそ、典型的なアート・ツーリズムであると考えられている。

種類	例
美術館	フィレンツェのウフィツィ美術館、マドリードのプラド美術館
オペラハウス	ミラノ・スカラ座、シドニー・オペラハウス
劇場	ニューヨークのブロードウェイ、ストラトフォード・アポン・エイボンのロイヤル・シェイクスピア・カンパニー
バレエ	ロンドンのサドラーズ・ウェルズ、モスクワのボリショイ・バレエ
クラシック音楽	ウィーンのコンツェルトハウス、ボストン・シンフォニー・ホール
芸術祭	エジンバラ国際フェスティヴァル、ヴェネツィア・カーニヴァル

しかしながら、近年、ポピュラーな娯楽、ミュージック・フェスおよびポップ・フェスティヴァルといった現代的形式のフェスティヴァル、民族芸術といったものを含む、より広い形の定義が提案されている (Hughes, 2000; Smith, 2003)。文化のあらゆる側面につきものであるが、アート・ツーリズムとポピュラー・カルチャーおよび、より広い文化ツーリズムの分野との関係を見るとき、定義に関する問題があるのだ。ポピュラーな浜辺の娯楽 (余暇の経験の一部として多くの人に享受される) も、アート・ツーリズムに含むべきだろうか。ポップ・フェスティヴァル (若者の旅行にとっての主要な動機である) はアート・ツーリズムの一分野とするにふさわしいものだろうか。歴史的価値のある芸術を所蔵する多くのアート・ギャラリーは、おそらく、アート・ツーリズムのア

トラクションというよりも、遺産ツーリズムの一部と見なされるのではないか。このように、明確さには欠けるものの、アート・ツーリズムは、多くのツーリストにとっても、アート・ツーリズムに関する商品の幅を広げてきた産業にとっても、さらには、アート・シーンを促進し、アートが誘導するツーリズムの開拓および、都市再開発計画を行ってきた地域や都市にとっても、魅力的な選択肢であることはまちがいない (Evans, 2001)。

アート・ツーリズムの需要は、ツーリズム市場の成熟にもともなって増加してきた。この成熟のプロセスは、個別化された特定関心の余暇への興味を増すこと、および、ツーリズム活動を通じて、より深い経験、意味、アイデンティティを得ようとするものの二つを含んできたが、いずれも、芸術に関する出会いへの興味が増大していることを示すものである。アート・ツーリズム関係の場所や経験の供給もまた増加していると言うことができる。新たな芸術祭や、ロンドンのテート・モダン、ビルバオのグッゲンハイム美術館など旗艦美術館が、人気のツーリスト・アトラクションになっているのだ。テート・モダンは、2007年のイングランドにおいて、4番目に人気の無料施設となっており、500万人以上が訪れた (VisitBritain, 2008)。主要都市における週末の劇場チケット付きの宿泊パックを売る短期ツアーの運営者は増加しており、アート・ツーリズム専門のツアー運営者は、個別の旅程にバックステージ・ツアーや演出家との会話という特典をつけたパッケージを提供している。これらの会社、たとえば25年以上にわたって業務を行ってきた「プロスペクト・ツアーズ」のような会社は、少人数のグループで旅する、慧眼で多出費のアート・ツーリスト向けの特定芸術に関するパッケージを提供している (Prospect Tours, 2009)。

けれど、このような例にもかかわらず、ATLAS (観光・余暇教育協会) が2007年に実施した最近の調査によると、アート・ツーリズムは明らか

に遺産ツーリズムよりも人気がなく、調査対象のツーリストのうち65%以上が美術館を訪れ、52%が史跡を訪れたと回答しているのに対し、アート・ギャラリーを訪れたと回答したのは24%に留まり、劇場に関しては12%、クラシック音楽のイベントに関しては5%に留まった (ATLAS, 2007)

(*訳注2)。このことは、遺産が通常、その場所に極めて固有のものであり、現地のことを知る過程の一部をなしていると捉えられるのに対し、芸術実践 (art performances) は、より普遍的なものだと捉えられることから説明される。訪問者は、舞台よりも史跡の方が、自発性と自由を与えてくれると思うだろうし、芸術に関しては、往々にして、言語の壁があるのだ。もちろん、遺産と芸術は相反する活動ではないし、多くの訪問者が、昼は史跡、夜は芸術を楽しむのだが (Hughes, 2000: 70)。

以上から、アート・ツーリストは、必ずしも同じ関心を持ち、同じ行動をする同質的な集団ではないことが判る。そうではなく、特定の芸術にのみ強い関心をもつ訪問者から、芸術施設を気軽に訪れる人まで、異なるタイプの訪問者がいるのだ。Hughes は、その動機と関心のレベルに応じて、アート・ツーリストを分類し、この異質性について述べている。それによると (Hughes, 2000)、《芸術-中心的》ツーリスト (*art core tourist*) とは、特定の芸術実践を見るために旅行することにした人々を指し、《芸術-周辺的》ツーリスト (*art peripheral tourist*) とは、他の目的で旅行をするが、旅の一部として芸術実践に触れる人々を指す。《芸術-中心的》ツーリストは、さらに、出発前から鑑賞を決めている「主目的型」芸術関連ツーリスト ('primary' arts-related tourist) と、目的地を訪れる他の理由と同等の重要性をそこでの鑑賞に置いている「多-主目的型」芸術関連ツーリスト ('multi-primary' arts-related tourist) とに分類される。同様に、《芸術-周辺的》ツーリストも、鑑賞することへの関心が、訪問目的において二次的である「付随的」芸術関連ツーリスト

(‘incidental’ arts-related tourist) であるか、目的地に到着してから鑑賞することを決め、芸術が訪問を決めたときの理由となっていない「偶発的」芸術関連ツーリスト (‘accidental’ arts-related tourist) であるかという観点から分けることができる。このような分類により、アート・ツーリズムという分野に関わる人々は、アート・ツーリストたちの、複数の動機および意思決定プロセスを理解することができ、この知識により、アート・ツーリズムを組織する人々は、適切な商品開発および、マーケティング労力の照準設定を助けられる。

アート・ツーリズムは、明らかに個々の施設や土地全体に利益をもたらすものである。チケットの売り上げや、一般に文化目的のツーリストと相関性のある多出費によって、いっそうの収入がもたらされうるし、さらには、アート・イベントは夜に開催されることが多いため、多くの宿泊客も見込める。活発なアート・シーンは、その土地のイメージを高め、訪れ、居住し、働くのに、より魅力的な場所とすることができるし、芸術施設は、都市再開発計画の中心的役割を演じもする。しかしながら、アート・ツーリズムの分野にも緊張関係がある。芸術に従事する人々は、他のツーリズム産業と異なる優先順位をもつことがしばしばであり、芸術部門によって提供される上演や展示のための所要時間は、アート・ツーリズムの休暇パックに組み込むには適さないこともしばしばである (Smith, 2003)。そして最後に、ツーリズムとの関わりが芸術にもたらしうる影響についての懸念もある。つまり、矮小化や本物らしくなくなること (inauthenticity) など、芸術形式そのものへの否定的影響につながるかもしれないのだ。Hughes は、ロンドン・シアターランドの生産性に対するツーリズムの影響を調査し、観客に占めるツーリストの割合が大きいため、ミュージカルの供給過剰になっており、シリアスな劇場の損失につながっているとした (Hughes, 1998)。

以上のように特徴づけられるアート・ツーリズムは、比較的小さいが多出費の訪問者集団に対して魅力的であり続け、ツーリズムの販売促進と、多くの地域の発展にとっての一級的手段と見なされうる。他方、それとは別の形式の芸術経験も参加者に享受され、訪問者の経験を高めている。

ハイ・アートは、しばしば、それを鑑賞することが名聲的価値をもつとか、社会的ステータスになるという理由によっても動機づけられた聴衆を引きつける傾向にある。このことを次のものと比較すると、ツーリストに人気のある種類の芸術イベントが、なぜ人気なのか分かってくる。すなわち、フェスティバルやカーニバル、ロック・コンサートにおいて、観客や参加者は、本物の、自発的な喜びを感じているのである。(Smith, 2003: 139)

ツーリストたちに評価され、観光収入に貢献する芸術実践をも射程に入れた、より広い形の定義の方が、現代のアート・ツーリズムの射程と影響を、よりよく反映したものであろう。今後も、オペラ・ツアーや、劇場で過ごす休暇、ローマ・パリ・フィレンツェといった国際的芸術都市への訪問を対象とした市場は存在し続けるが、ロック・フェスティバルやライト・エンターテインメントを含むポピュラーな芸術形式は、より多くの聴衆によって楽しまれ、アート・ツーリズムの分野への重要な貢献者として認識されるに値するものである (*訳注3)。

【関連項目】文化ツーリズム、フェスティバルとイベント、遺産ツーリズム、再開発、特定関心ツーリズム

【読書案内】

研究進行中の分野であり、今もって Hughes の著作が最も網羅的で、定評のある研究である。より広く、文化ツーリズムの領域をカバーしたものとし

て、Smith の著作と Richards の編著作を挙げることができる。

【推薦図書】

Hughes, H. (2000) *Arts, Entertainment and Tourism*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

Richards, G. (ed.) (2007) *Cultural Tourism: Global and Local Perspectives*. New York: Haworth

Smith, M. K. (2003) *Issues in Cultural Tourism Studies*. London: Routledge.

(訳注1)「グランド・ツアー」は一般的に、18世紀イギリスの支配階級・貴族の子弟が教育の仕上げとしてイタリアに見聞旅行を行ったものを指すが、それに先立って16世紀以来、北方の画家たちの多くも芸術の国としてのイタリアに赴いていた(岡田温司『グランドツアー』、岩波新書、2010、pp. i-ii)。ここでは、そのことを念頭に「16世紀の初期グランド・ツーリストたち」という表現をしているのだと考えられる。

(訳注2)「アート・ツーリズムは遺産ツーリズムの一部」、「歴史的価値のある芸術を所蔵するアート・ギャラリーは、アート・ツーリズムのアトラクションというより遺産ツーリズムの一部ではないか」という記述に照らすと、混乱が生じている(そもそも、その両者が矛盾しているのだが)。とはいえ、遺産ツーリズムの一部で、アート・ツーリズムとも呼べる・呼びうるもの(美術館、歴史的価値のある芸術を展示するアート・ギャラリー)、遺産ツーリズムでしかないもの(史跡)と比べ、遺産ツーリズムの一部だとしても、アート・ツーリズムとしての固有性をそなえているもの(比較的新しい作品を展示するアート・ギャラリー、劇場、クラシック音楽イベント)と考えれば、整合的に読解できる。

(訳注3)原著者は、アート・ツーリズムを遺産ツーリズムの下位概念とする定義を保持しているため、作品・イベントと、それが展示・上演される場所の強い結びつきがあるものを典型的なアート・ツーリズムの対象として捉えることから出発する。であるなら、スカラ座のオペラとロック・フェスティバルの違いを上演場所との結びつきの強弱という観点から考えることができただろう。すると、特定のロック・アーティストにとっての日本武道館や、「フジロックフェスティバル」の会場のような「聖地」化の事例、逆に、スカラ座の東京公演に神戸から赴くような事例が指摘でき、問題はハイカルチャー/サブカルチャーの違いではなく、アート・ツーリズムを遺産ツーリズムの下位概念とするべきか否かと

いう前提自体だと指摘してもよかった。その点を相対化すれば、「より広い定義」を受け入れることは容易だ。なお、アート・ギャラリーに関する混乱も、作品自体が移動する出張展示の事例を考えれば、解消できる。つまり、展示・上演場所と関係なく、アートを対象とし、かつ「ツーリズム」と呼べるものを「アート・ツーリズム」と呼び、同時に遺産ツーリズムでもあるものが数多く存在すると考えればよい。すると問いは、アートを対象とする移動のうち、どのようなものを「アート・ツーリズム」と呼ぶのか、というものに還元される。

【伊多波】

【文化ツーリズム(Cultural Tourism)】

文化ツーリズムは旅行への主要な動機として文化的魅力や活動、実践に焦点を合わせるツーリズムと定義される。それは遺産ツーリズムやアート・ツーリズム、先住民ツーリズムといった多くの下位部門を含みうる。

文化の諸定義が多様であり、かつそれが変化し続ける故に、伝統的に文化ツーリズムの定義は困難とされてきた。文化理論家の Raymond Williams (1976) はかつて、英語という言葉の中で最も複雑な語の一つとして文化を挙げ、それを「諸芸術や学習」(the arts and learning)と人々の「生活様式全般」(a whole way of life)との両者を指すものと定義した。これは文化が過去や伝統(例:歴史や遺産)、創造的表現(例:諸芸術作品、諸々のパフォーマンス)、そして人々の生活様式や彼らの慣習と習慣に関係することを意味する。多くのツーリストは史跡や記念碑、博物館やギャラリーに関心を持つと同様に、世界中の様々な人々の文化に関心を持っている。

Richards (1996) は、ATLAS(「ツーリズムとレジャーの為の教育研究協会」)の為の研究の中で文化ツーリズムに関する以下の2つの定義を提案している。

技術的定義(Technical definition) :

人々が日常的居住地の外側にある、博物館や遺産のある場所、藝術的パフォーマンスや祭りといった特定の文化的魅力へと向けて行う全ての移動。

概念的定義(Conceptual definition) :

人々が自らの文化的必要を満たす為に新たな情報や経験を収集するという意図を持ちつつ、日常的居住地を離れ文化的表現へと向かう移動。

しかし、これらの定義は人々の生活様式としての文化を考慮していない。後年の Richards (2007) による定義は更に包括的であり、文化ツーリズムが以下を包摂することを提案するものだ。

文化ツーリズムは単に過去の文化的生産物の消費であるのみならず、現代文化や或る人々・地域の持つ「生活様式」(way of life) の消費でもある。よって文化ツーリズムは「遺産ツーリズム」(heritage tourism) (過去の藝術作品に関係する) と「アート・ツーリズム」(arts tourism) (現代的文化生産に関係する) の両方を包摂するものとみなされうる。

Richards は、文化ツーリズムは単に受動的消費、つまり歴史的な場所や博物館のコレクション、絵画や演劇の上演を単に見ることを表現するのではないのだとも主張する。多くのツーリストはますます「創造的ツーリズム」(creative tourism)に関心を持ち始めている。それは文化的諸活動(例: 絵画、写真、工芸、ダンス、料理)への参加を含むものである。**経験経済(the experience economy)**を強調する動きも高まって来ている。そこで Smith (2009:23) は、文化ツーリズムに関する以下の定義を提案する。

(諸)文化や諸共同体への受動的・能動的・双方向的参加。そこで観光客は教育的・創造的性質、

そして/或いは、娯楽的性質を持つ新たな経験を
得る。

この定義は、教育とエンターテインメントが相互排他的ではない点、ツーリスト達が多く異なる文化や共同体に同時に関わる点を示しているのに加え、文化ツーリズムの更に能動的で双方向的な形式へのシフトを反映している。

多くの文化ツーリスト達は、文化的経験の場所と**真正性(authenticity)**に対し明確な関心を持つ。例えば Smith (2003) は、いわゆる**ポスト・ツーリズム(post-tourism)**と文化ツーリズムとを差異化し、文化ツーリスト達の方が地域共同体やその伝統と本物の相互作用を持つことに関心があると結論する。文化ツーリズムは、それにより文化ツーリストが彼自身あるいは彼女自身を冒険家や探検家とみなす「旅行」(travel)だと言われうる。これは特に**先住民(indigenous)**ツーリズムやエスニック・ツーリズムの文脈に当てはまる。この場合ツーリスト達は元々の居住環境にいる地域住民を訪れることを欲するのだが、その居住環境が時にかなり遠い場合もある(例: ジャングル、砂漠、小さな村)。また Richards (1996) の研究は、文化ツーリスト達が平均的ツーリストに比べ良い教育を受けている点、地域住民や環境や文化に対しツーリズムが与える影響により敏感な点を示している。

文化ツーリズムは成長産業として、更に多様化しつつあるツーリズム部門としてしばしば引き合いに出される。故にその生産物や市場の下位部門や下位区分を考慮する必要がある。Hughes (1996) は、「普遍的」(universal)・「幅広い」(wide)・「狭い」(narrow)・「部門化されている」(sectorized)という風に文化ツーリズムを差異化する。これらの定義は大まかに以下の事柄に対応している。即ち、文化を生活様式全般と見なすこと、特定の民族的・先住民的な人々と関わること、或る社会の「藝術的で知的な」(artistic and

intellectual)諸活動を経験すること、特定の魅力的遺産や藝術に関する場所を訪問すること。

幾人かの論者によれば、文化とは多くのいわゆる文化ツーリスト達を動機付ける《一つの》(one)要因ではありうるが、必ずしも第一番目の要因ではない。McKercher and du Cros (2002)は文化ツーリストに関して以下の5類型を提案する。

(1)《目的を持つ》(purposeful)文化ツーリスト。文化が第一動因であり深い文化的経験を探求する。

(2)《観光的な》(sightseeing)文化ツーリスト。文化的理由により旅行するが、より浅い経験を求める。(3)《幸運な》(serendipitous)文化ツーリスト。第一に文化により動機づけられるのではないが、深い文化的経験へと偶然巻き込まれる。(4)《軽い》(casual)文化ツーリスト。文化は弱い動因であり、浅い経験を求める。(5)《付随的な》(incidental)文化ツーリスト。文化は明言された動機ではないが、文化的魅力のある場所を訪れる。

然しながらその多様性と複雑性故に、文化ツーリズムは多くの下位部門や類型へと分割されうるのが恐らく最上であろう。下位部門や類型は**遺産ツーリズム(heritage tourism)**、**アート・ツーリズム(arts tourism)**、**創造的ツーリズム**、**先住民ツーリズム(indigenous tourism)**を含みうる。訪問される環境の種類は都市的或いは田園的でもありうるし、自然発生的或いは人工的でもありうる。これらの各エリアは批判的研究や実践的マネジメントに関係して、それ固有の特定の諸問題を持つ傾向にある。

遺産ツーリズム(Heritage tourism)は、有形の場所と無形の伝統の両方に焦点を当てる。典型的呼び物としては先住民共同体が持つ歴史やライフスタイルと同様に、歴史的記念碑や歴史的街区、世界遺産が含まれうる。遺産の解釈と展示は最重要である所有権に関する問題を伴い、複雑で論争的でありうる。多くの遺産は過剰訪問によっても悩まされており、保存と観光客管理もまた文化ツーリズムのこの下位部門で鍵となる主題である。無

形遺産の概念はより意義深くなって来ており、(遺産に関する組織体の中では)ユネスコがこの事実を認識している。故にユネスコは、言語・物語・藝術スタイル・音楽・舞踊・宗教的信念を含む無形文化遺産の保護を援助する協定を作った。言い換えれば、文化のこれらの側面は直接に物質的事物に具現化されないということである。(UNESCO, 2009)

アート・ツーリズム(Arts tourism)は、文化的**祭典やイベント(festivals and events)**と同様に、視覚芸術や舞台芸術に焦点を当てる。ギャラリーや博物館、劇場やコンサートへの訪問に加え、地域住民によるアートや工芸、彼らによるダンスや音楽のパフォーマンスに関係する、より実験的なツーリズム形態もここに含まれる。文化的祭典—特に**謝肉祭**—はますます多くの観光客を惹きつけている。ツーリズムが商業化を通しアートを希薄なものとする、或いは「些末化する」(trivialise)のではないかと若干の懸念もある。多くの民族的・先住民的藝術形式が、確かにグローバル規模でより人気を博するようになってきており、故にそれらが過度に商業化されたり搾取されたりしないようにケアされる必要がある。

創造的ツーリズムは文化ツーリズムへの更なる能動的参加から成り、それによりツーリスト達は個人レベル或いは集団的レベルで何かを創造する。絵画や陶芸、写真やダンスなどの藝術的で創造的実践に休暇が利用されることが増加している。地域共同体と離れた所でツーリスト集団が活動に参加する場合もあるが、ホスト—ゲスト間の相互関係が経験の主要部分を成す場合もある。最近ではUNESCO (2006)がいわゆる創造的ツーリズム運動の前面に立つようになり、創造的ツーリズムが文化や歴史への更なるアクセスを含むべき点や、或る場所やその住民の実際の文化的生活の中での真正な参加を伴いつつ、実験的に何かを為すことを含むべき点を主張している。

都市に関する (Urban) 文化ツーリズム

(tourism)は、街や都市で生じる諸活動に焦点を当てる。これらの多くは特に歴史的・文化的都市における遺産や藝術に関わりうる。しかしかつての工業都市群はますます再生を果たしつつあり、巨大レジャー・エンターテインメント複合施設、新たな文化的・創造的街区、そして「巨大イベント」(mega-events)などの形態で新たな魅力を提供している。(再生〔regeneration〕の項目を参照)

田園に関する(Rural)文化ツーリズム(tourism)は、自然風景が主要な呼び物となりうる田園地帯で生じる傾向にある。幾つかの活動は環境や農業に関する開発(例:エコミュージアムや農業ツーリズム)、美食(gastronomic)・ワインツーリズム、或いは文化的景観(例:文学ツーリズム〔literary tourism〕やフィルムツーリズム〔film tourism〕に関連する景観)に焦点を当てる。健康やウェルネス、ホリスティックに関するセンターが田園地帯に建設されつつあり、その多くはスピリチュアルな諸活動(例:ヨガ、瞑想)と同様に文化的・創造的諸活動を含む。

民族的・先住民的(indigenous)な文化ツーリズム(tourism)は、地域住民の住居を訪れたり、彼らの伝統や文化的実践に参加したりすることを望む観光客達を惹きつける。主要な動因は観光客達と地域住民達との自発的で本物の相互作用だろう(しばしばこれは観光客に気づかれない形で「舞台化」〔staged〕されているのだが)。これは繊細に管理される必要のあるツーリズム形態である。何故なら、多くの先住民は植民地統治者やそれを引き継いだ政府により手厳しく扱われてきたからである。彼らは先住民から土地を奪い、彼らの伝統的ライフスタイルを希薄化、或いは根絶してしまった。諸活動にはトレッキングや文化的・創造的諸実践(例:工芸品製作やダンス)への参加が含まれる。環境や社会・文化に与える影響は甚大となりうるが、文化ツーリズムは先住民グループの政治的評価の向上や、伝統と文化的誇りの更新にも貢献しうる。

大衆的・現代的な文化ツーリズムは、多くの観光客達が余暇時間に何らかの形で享受すると見られる大衆的娯楽(例:ショッピング、スポーツ、テレビ、映画)に焦点を当てる。それは、観光客達がこれらの諸活動を同時に楽しめる新たな呼び物(例:エンターテインメント複合施設、ショッピングモール、テーマパーク、映画やテレビのスタジオやそれに関するツアー)の提供による、大衆的娯楽への関心の拡張を表す。然しながら、これらの諸活動は文化ツーリズムよりも寧ろポスト・ツーリズム(post-tourism)というカテゴリーに属するとしばしば言われる。

結論として、文化ツーリズムを巡る議論はツーリズムそのものが成長し多様化するに連れ常に変化するものであり、批判理論やポストモダン理論は文化を定義することに疑念を呈するものだと言える。然しながら、下位区分を為す類型学や輪郭付けは文化ツーリズムの本性と射程とを理解するのに役立つものである。

【関連項目】アート・ツーリズム、祭典・イベントツーリズム、遺産ツーリズム、先住民ツーリズム

【読書案内】

Smithによる *Issues in Cultural Tourism Studies* と *Issues in Global Cultural Tourism* は文化ツーリズムに関する政治とマネジメントの双方について包括的分析を与える。幾つかの興味深い事例研究が以下の書物の中に見られる。Smith and Robinson の *Cultural Tourism in a Changing World: Politics, Participation, and (Re)presentation*、Leslie and Sigala の *International Cultural Tourism: Management, Implications and Cases*、そして Richards の *Cultural Tourism: Global and Local Perspectives* である。

【推薦図書】:

Leslie, D. and Sigala, M. (eds) (2005) *International Cultural Tourism: Management, Implications and Cases*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

Richards, G. (ed.) (2007) *Cultural Tourism: Global and Local perspectives*. New York: Haworth.

Smith, M. K. (2003) *Issues in Cultural Tourism Studies*. London: Routledge.

Smith, M. K. (2009) *Issues in Global Cultural Tourism*. London: Routledge.

Smith, M. K. and Robinson, M. (eds) (2006) *Cultural Tourism in a Changing World: Politics, Participation and (Re)presentation*. Clevedon: Channel (メラニーK.スミス、マイク・ロビンソン (阿曾村邦昭、阿曾村智子訳)『文化観光論 理論と事例研究』(上下巻)、古今書院、2009年)

【原】

【ダーク・ツーリズム (Dark Tourism)】

ダーク・ツーリズムは、死、災害、戦争、虐殺、人的被害などにかかわる場所を旅行者が訪問することからなる。これらの場所には、死者や墓地などの記念物も含む。

その名の示す通り、ダーク・ツーリズムは人の経験のより悲惨な側面に対する関心によって惹起されるツーリスト行動を指す。近年この現象について、研究者は「死のツーリズム(thanatourism)」(Seaton, 1996)、「ブラック・スポット・ツーリズム (Black spot tourism)」(Rojek, 1993)、「残虐行為の遺産(heritage of atrocity)」(Tunbridge and Ashworth, 1996)、「センセーション・サイト (sensation site)」(Rojek, 1997)など、さまざまな用語で言及してきたが、Lennon and Foleyはこの分野の著作(2000)で、このダーク・ツーリズムという用語を有名にした。これらの研究者が検討した場所には、墓地、戦場、有名人の死亡した場所、災害が起こった場所、刑務所、拷問部屋、虐殺現場や記念物などが含まれる。有名な事例として、オスカー・ワイルドやジム・モリソン(*訳注1)が埋葬されているパリのペール・ラシェーズ墓地、ニューヨークの世界貿易センター跡地のグラウンド・ゼロ、ダラスのケネディー大統領暗殺現場、ポーランドのアウシュヴィッツ強制収容所(死

のキャンプ)などがあり、どれも人数の多寡はあれ観光客をひきつけている。

Lennon and Foleyの定義によると、ダーク・ツーリズムは、最近の(つまり、生きた記憶のなかの)死、災害、残虐行為にかかわる場所を特に指している。彼らはポストモダンの理論のなかで分析を進めている。1912年のタイタニック号沈没を出発点に選び、ダーク・ツーリズムが地球規模の通信ネットワーク、近代に対する不安、ポストモダンのもつ商品化の強調などのポストモダン文化の産物であるとする。第1に「地球規模の通信技術は当初の興味を創りだすのに重要な役割を果たしている」(Lennon and Foley, 2000: 11)。その後は、ダーク・ツーリズム・サイトそのものが「近代の将来予想に対する不安と疑念を誘発するようだ」(前掲)と彼らは論じている。たとえば、ユダヤ人大虐殺をもたらした合理的な計画技術の使用や、不沈船タイタニックが沈没した時の技術の失敗などが示唆するのは、近代性が社会を栄光の将来に導くものではないだろうということだ。最後にポストモダン文化に内在した消費は、潜在的なダーク・ツーリズム・サイトが教育と「商品化の要素、および訪問はツーリズム商品を開発する機会だと認める商業的倫理」(前掲)を結びつけることに反映されている。

他の研究者は、この形態のツーリズムにはかなり長い歴史があり、FoleyとLennonが示唆するよりももっと幅広いサイトを包含すると考えている。これらの重要な研究者の著作の短い要約を以下に示した。

Rojek, 1993 ブラック・スポット・ツーリズム (Black spots tourism)

「ブラック・スポット」という新たな用語を作ることで、Chris Rojekは来訪者向けアトラクションの邪悪な側面に結び付く二重の意味を示唆する。第1に、実在の「ブラック・スポット」とは、死、あるいは複数の死を印す場所(たとえば、墓

地や死者の記念物)を指す。第2に災害の現場や有名な人物が死んだ場所をも指す。これら両方のケースで、旅行者はその場所を訪れ、メッセージを残す。これらは書付や落書きの形をとる場合もあれば、ロールプレイのような複雑な儀礼となる場合もある。Rojek はジェームス・ディーン・ファン・クラブが、彼がカリフォルニア州コレームで亡くなった命日に毎年、彼の最後の旅のルートをたどる例を引用している。

Rojek, 1997

センセーション・サイト (*Sensation sites*)

1993年の「ブラック・スポット」に関する著作に続いて、Rojek は彼が「センセーション・サイト」と呼ぶツーリスト・サイトの範疇を含めるよう定義を改良した。これらは、同時代の大災害現場で、暴力的な死、誘拐、包囲攻撃などに関わる。Rojek が引喩した例には、1988年にパンアメリカン航空103便が爆破されたロッカビー (*訳注2) や、1987年のゼーブルッヘでのフェリー転覆事故 (*訳注3) がある。今なら2001年のニューヨーク世界貿易センターのグラウンド・ゼロや2002年に二人の少女が殺害されたイギリスのソナム (*訳注4) など最近の事例を加えることもできよう。上記の「ブラック・スポット」とこれら特定の「センセーション・サイト」を区別するのは、「センセーション・サイト」がその場所へ人々が実際に旅したり、心の中で旅したりすることを勧める点である。その場での観察や遠隔映像の視聴は、視聴者の毎日のルーチンを中断し、墓場や戦争記念物を訪れる際に体験するよりもより高次の参加をその出来事に対してすることが可能になる。メディアによるそうした出来事の報道によって可能になる集団的体験の感覚があり、それが、出来事の共通にかかわることによってアイデンティティやコミュニティ感覚の強化につながっている可能性がある。

Seaton, 1996

死のツーリズム (*Thanatourism* (*訳注5))

Seaton によれば、「死のツーリズム

(*thanatourism*)」は近代の現象というより中世に遡る伝統である。それは、死(それも凶暴な死)のあるところに居合わせたいという願望に動機付けられた旅行を指す。初期の例としては、聖者の殉教や埋葬の地への巡礼が挙げられる。関連する人物の有名であればあるほど、訪問の動機は強まったのだろう。「死のツーリズム」は、目的地のどんな特徴よりも、むしろ旅行者の動機に関連するので、行動に関わるものである。死のツーリズムは弱いものから強いものまで幅広い。存在する最も強烈な形態は、人々が一般化された死に魅了されたという理由だけで動機付けられているところに存在する。最も普及している形態は死者が来訪者の知人である場合(たとえば、旅行者がなくなった親戚を追悼するために戦争記念碑を訪ねるような場合)である。「死のツーリズム」には判定的な評価は含まない。この種の行動がかほどに蔓延し、長い歴史を持っているのだから、「死のツーリズム」には我々が共有する強い魅力があるに違いないと、Seaton は信じているからである。

Tunbridge and Ashworth, 1996

残虐行為の遺産 (*Heritage of atrocity*)

不快な遺産についての著作のなかで、Tunbridge と Ashworth は、語られるべき歴史や使われる解釈の形態について不協和音があつたり、合意が無かつたりすることを体現する遺産サイトの事例を研究している。探求された潜在的に不快な分野のひとつが、「残虐行為の遺産」—すなわち、人類のトラウマが遺産的なアトラクションとなったサイトである。Tunbridge と Ashworth は、そうしたサイトが建てられるもととなった残虐行為を7類型に分類した。

- ・ 人間の介入あるいは無視によって被害が悪化した自然災害や事故による残虐行為(たとえば、1940年代にヨーロッパでおきたジャガイモの葉枯れ病はアイルランドでの飢饉を引き起こした。)
- ・ 「広範な集団」残虐行為—すなわち(たとえば

奴隷貿易)

- ・ 戦時中の残虐行為（たとえば戦時における市民の虐待）
- ・ 虐殺（1968年に米軍がヴェトナム市民を虐殺したソンミ村虐殺事件）
- ・ 大量虐殺—ある民族集団を多数破壊すること（たとえば、1933～45年のナチスドイツによるユダヤ人大虐殺）
- ・ 迫害と司法手続—上述したものよりも重大でない残虐行為の類型である。文化集団・言語集団に対する差別や、現在は「非人道的」と認識されている司法手続（たとえば、南アフリカのアパルトヘイト政策）に関連する。

これらすべての類型について遺産が形成され、来訪者をひきつけている。しかし、その遺産を誰のものとして展示するか、残虐行為の被害者と加害者の認識の対立をどう扱うかといった解釈上の難問も提起している。

上記の研究者は、「ダーク・ツーリズム」の現象について非常に異なる観点を持っているが、以下の点では合意している。すなわちこのツーリズムの形態は、古代のものであれ、ポストモダンのものであれ、死や災害を商品化し、矮小化しており、苦悩を現代の旅行者の余暇体験に変えている点で批判されうると考えている点である。また、いくつかの場所では真正性（Authenticity）に関する懸念もある。たとえば、ダーク・ツーリズムのテーマを探る来訪者向けのアトラクションが、実際にダークな出来事が起きた場所とは地理的に全くつながりがなければ、真正な体験を提供しているとは思われないだろう。Tunbridge と Ashworth（1996）はそうしたサイト、特に被害者と加害者の見方のどちらか一方が目立つサイトで、不協和音や不調和が生じる可能性を強調している。

これまで説明してきた研究者の著作は、他の研究者によって拡張されてきた。死に関連するツー

リズムサイトは画一的に「ダーク」なのではなく、恐ろしさの度合いはさまざまであることを示唆した（Stone, 2006; Strange and Kempa, 2003）。彼らは、こうしたダークネスの分布を、そうしたサイトの提供者にだけでなく、旅行者自身の動機にも関係づけた。最もダークな(darkest)サイトは、教育と追悼に動機づけられた来訪者に向けられ、真正だと認識され、最近の出来事にも関連があり、来訪者施設も最小限しかない。逆に「より明るい」(Lighter) サイトは、商業的な娯楽を目的とした人々に向けられ、真正でないと認識され、遙か昔の出来事と関連付けられ、よく発達したツーリズム・インフラのなかで稼働している。

死への興味が非常に人間的な関心事であるのは事実であり、死が人目にふれぬものとされた衛生的な社会では、命とその終わりの現実を熟考する機会を私たちがツーリズム・サイトから受け取るのはたぶん有益なことである。こうした熟考が商業的余暇の環境で行われるのが適切かどうかは、ダーク・ツーリズムの分野での重要な論争のひとつである。

【関連項目】オーセンティシティ（真正性）、ポスト・ツーリズム

【読書案内】

以下の資料を読めば、この学術研究分野の最近の展開について、かなりバランスのとれた知見を得ることができるだろう。時間的枠組みの狭さを批判されてきたが、Lennon と Foley の *Dark Tourism* は興味深い事例研究集であり、この研究分野への有用な貢献である。また、同じく興味深いのが、2005年に始まった Central Lancashire 大学のウェブサイト、Dark Tourism Forum^(*) である。この有用なウェブサイトでは事例研究、論文が公開されているほか、ダークツーリストの動機を理解する興味深い試みとして来訪者に「ダークツーリストの日記」を入力するよう奨励している。

【推薦図書】

Lennon, J. and Foley, M. (2000) *Dark Tourism: The Attraction of Death and Disaster*. London: Thomson.

Rojek, C. (1993) *Way s of Escape: Modern Transformations in Leisure and Travel*. London: Macmillan.

Seaton, A. V. (1996) 'Guided by the dark: form thanatopsis to thanatourism', *International Journal of Heritage Studies*, 2 [4]: 234-44.

Tunbridge, J. E. and Ashworth, G. J. (1996) *Dissonant Heritage: The Management of the Past as a Resources in Conflict*. London: John Wiley & Sons.

(訳注1) アメリカのロックスター (ザ・ドアーズのボーカル)。1943年生、1971年没。

(訳注2) 1988年12月21日、イギリス・ヒースロー空港を離陸したパンアメリカン航空103便がスコットランド地方上空で爆破された事件。空中分解した機体はロッカビー村に落下し爆発、村に大きな陥没跡が残った。乗員、乗客のほか巻き添えとなった住民を含め270名が犠牲となった。

(訳注3) 1987年3月6日夜、ベルギーのゼーブルッヘ港で英国フェリー船Free Enterprise号が転覆し、乗員乗客193名が死亡した事件。イギリスの海難事故として20世紀2番目の被害であった。

(訳注4) 2002年8月4日にイギリス、ケンブリッジシャーのソハムで10歳の女子児童Holly WellsとJessica Chapmanの2名が地元中学校の管理人Ian Huntleyの自宅に招き入れられた後、殺害された事件。

(訳注5) 「死」を意味する連結語 'thanato-' と 'tourism' を合成した術語である

(訳注6) URL : <http://www.dark-tourism.org.uk/> 管理者は The Institute for Dark Tourism Research, University of Central Lancashire, UK。

【小槻】

【エコツーリズム (Ecotourism)】

エコツーリズムは、手付かずの自然地域で行われ、環境の保全、地元コミュニティの生活向上、訪問者の教育に努める旅行のことである。

エコツーリズムは、概念的には、持続可能なツーリズム (sustainable tourism) および倫理的ツーリズム (ethical tourism) と強い関連があり、冒険ツーリズム (adventure tourism) と多くの特徴を共有している。「エコツーリズム」の用語は、手付かずの自然地域で行われ、その地域の自然・文化資源について学習することを重視する旅行を表す。エコツーリズムの定義として最も引用されることが多いのは、1987年にメキシコ人ツーリズムコンサルタントのヘクター＝セバロス＝ラスクラインが提起した「風景や野生の動植物、その地域に見られる (昔や今の) 文化的な側面を学習、賞賛、満喫するという特定の目的をもって、比較的手つかずの、汚染されていない自然地域へと向かう」旅である (Ceballos-Lascurain cited in Page and Dowling 2002)。したがって、このエコツーリズムという用語は、山岳やジャングルのトレッキング、雨林やサンゴ礁など特有の生態系への訪問、マウンテンゴリラやイルカ、クジラなどの野生動物を見に行く、サファリツアーなど幅広いツーリスト活動を包含する。エコツーリズムはグローバルな現象であるが、世界には、エコツーリズムの目的地として好まれるようになった地域がいくつかある。たとえば、オーストラリア、コスタリカ、ベリーズ、ニュージーランド、ペルー、南極である。これらの地域が有名になったのは、特有の環境と野生動物が理由である。

エコツーリズムは、1980年代半ばに、環境問題への関心の高まりに対応して特別関心ツーリズムのひとつの分野として出現した。エコツーリズムは、ツーリズム産業のなかで現在最も急速に成長している部分である。国際エコツーリズム協会 (International Ecotourism Society) によれば、世界的にみると、エコツーリズム分野は他のツーリズム分野に比べて3倍の速さで成長している (TIES, 2006)。しかし、このように最近拡大しているが、この形態のツーリズムは新しい現象ではな

い。というのも、初期の冒険家たちは未発見の動物や植物、環境への関心に動機づけられていたからである。1980年代以来、エコツーリズムに対する産業界、消費者、学界の関心が高まり、2001年に David Fennell は学界及び産業界の資料から、80 を超えるエコツーリズムの定義を見出した (Fennell, 2001)。しかし、エコツーリズムの定義やアプローチの急増にかかわらず、この概念の下には 5 つの核となる原則があるという点に、論者はおおむね合意している。

エコツーリズムの 5 原則

自然

エコツーリズムは自然環境に依存する。自然環境の保全がエコツーリズム発展の鍵である。

生態学的に持続可能である

実際には個々の活動によって形態は異なるが、あらゆる形態のエコツーリズムは、生態学的に持続可能で、自然なセッティングで行われるべきである。

環境教育上

環境教育と解説 (インタープリテーション) がエコツーリズムを他と区別する重要な特徴である。エコツーリストは保全について学ぶことを期待している。

地元利益がある

地元コミュニティと環境を利益をもたらす、かつツーリストの体験の質を向上するために、エコツーリズムのプロジェクトは、地元コミュニティが参加すべきである。

ツーリストにとって満足できる

エコツーリズム体験への訪問者の満足度と訪問者の安全が、エコツーリズム産業の将来持続性には不可欠である。

すべてのエコツーリズム開発は、これら 5 つの原則を組み込むべきだが、実際には、その開発がエコツーリズムの「ハード」な現れとして定義され

るか、「ソフト」な現れとして定義されるかによって、強調される点は異なってくる。「ハード」なエコツーリズムでは、少人数で長期間人里離れた環境を訪れ、体力的にも精神的にも厳しい活動に取り組むのが通例である。ハードなエコツーリストは、観光インフラにはほとんど期待せず、自立しているのが一般的である。反対に、「ソフト」なエコツーリズムは、むしろマストツーリズムに似ていて、高度な支援設備のある比較的快適な場で、小旅行や容易にできる活動を行う。したがって、ハードなエコツーリズムからソフトなエコツーリズムに移るにつれて、その内容は深く積極的に関与する経験から、受け身の浅い出会いへと連続的に変化する。

エコツーリズム産業は大きく分けて、ツアー・オペレーター、エコロッジ、エコツーリズム・アトラクションの 3 つの部門から構成されている (Weaver, 2006)。ツアー・オペレーターの部門では、エコツーリズムの専門的な規定が著しく増加してきた。こうした規定では、オペレーターはエコツーリズムの 5 原則を守ることを約束し、エコツーリズム部門のために特別に開発された多くの行動規範に従うよう期待される。同様に、近年エコロッジの人気の高まってきている。こうしたエコロッジでは、提供する快適さの程度はさまざまだが、一般的に保護された環境の近くに位置し、地元の材料を使い、環境にやさしい建築技術やエネルギー技術を用いて、その土地固有のスタイルで建てられている。エコロッジの所有者は地元のコミュニティや起業家である場合がほとんどである。最後に、エコツーリズム・アトラクションは保護された環境への接近を容易にするために開発されてきた。よりソフトなエコツーリズムの中では人気があることがわかってきた。こうしたアトラクションの例としては、来訪者が林床を侵食することなく熱帯雨林を体験できるようにする樹幹遊歩道などがある。

上記で概要を説明したようなエコツーリズム商

品を提供する際に重要になる問題のひとつは、もちろん品質管理の問題である。潜在的なエコツーリストはどのようにして、彼らが使っているオペレーターやエコロッジが本当にエコツーリズムの諸原則を着実に実行していると確信できるだろうか。エコツーリズム産業は、産業規模の品質管理メカニズムを導入しようとした点で、ツーリズム諸分野の中で最も活発であった。エコツーリズム産業全体にかかわる構想や、たとえば南極地域で活動するツアー・オペレーターの小グループといった特定の小分野にかかわるものなど、多数存在する。Font と Buckley は、2001 年に 260 を超えたそうした自発的なプログラムが存在したと推計している。こうした広範な取り組みは、消費者の困惑を招いた。最近の調査によると、多種多様なエコラベルが存在すると、正当な認証プログラムを特定するのが難しいことが示唆されている (Honey, 2005)。おそらくもっとも有名で信頼されているプログラムは、オーストラリアのエコ認証プログラム (Ecocertification Programme) である。これはエコツーリズム・オーストラリア (Ecotourism Australia) によって運営され、1996 年から活動している。発祥地のオーストラリアから輸出され、国際エコツーリズム基準 (International Ecotourism Standard) になった。ツアー・オペレーター、宿舎提供者、来訪者向けアトラクションは、それぞれの特有のコアになる指標、上級の指標を 8 つの重要な原則を着実に実行しているとの認証評価を受けることができる。認証を得るためには、主な基準を 100% 満たさなければならない。上級認証を獲得するためには、オペレーターなら、最低限上級基準の 75% を合格しなければならない。オペレーターは、認証が有効な 3 年間は監査が義務付けられる。認証を受けたオペレーターはエコ認証ロゴを使うことができる。Ecotourism Australia によると、このロゴは、

旅行者が、環境的、社会的、経済的に持続可能な、

正真正銘のツアー、アトラクション、クルーズ、宿舎を選択し体験するのを支援する世界的に認められたブランドである。エコ認証プログラムは、認証された製品が、管理の行き届いた持続可能な実践への強い関与に支えられ、高品質の自然ツーリズム体験を提供することを、旅行者に保証する。(Ecotourism Australia, 2008)

こうした倫理的な資格認定や、世界的に認められる基準に近づこうとする動きにかかわらず、エコツーリズムは問題のある概念だとする批判も依然ある。まず、エコツーリストの典型的な特徴が示唆するのは、エコツーリズムが比較的裕福で、高学歴の中流階級の消費者に好まれるタイプのツーリズムであるという点である。こうした消費者は、環境保全に対する深い信念など示すというよりも、単にマスツーリストと自分たちを区別しようとしているのかもしれない。それゆえ、彼らは環境に関心があるのではなく、魅力的な休日体験がもたらす地位により強い関心がある。こうした地位は、そうした休日向け商品を販売促進する際に、ツーリズム産業がよく理解していることである。Brian Wheeler はこうした「エゴツーリスト」を批判し (Wheeler, 1994)、なぜエコツーリズムがいつも、航空国際線を必要とする遥か遠い目的地で行われるように思えるのか、と問いかけている。以下の引用はその好例である。

損傷を受けやすい目的地の環境のなかでは、これ見よがしに神経質に行動しようと努めるエコツーリスト (およびエコフレンドリーであると想定される企業) だが、概して環境全体への危機にはそれほど関心を持っていない。<中略>ここでは、便利さが良心に優先する。一空港へ車で行きジャンボジェットに乗るというのは、環境問題において美德ある模範とは言い難い。(Wheeler, 1993: 125)

エコツーリズムのパラドックスは、エコツーリズムが有名になればなるほど—そうなるのは確実だが—、エコツーリズムを提供することがますます困難になる、という事実にある。エコツーリズムの核心には、開発の規模は小さく、ツアーグループは少数に限るという理解がある。エコツーリズムが成長を続けるにつれて、エコツーリズムを達成するのは、不可能ではないにしても、難しくなるだろう。

【関連項目】倫理的ツーリズム、先住民ツーリズム、ルーラル・ツーリズム、持続可能なツーリズム

【読書案内】

エコツーリズム産業に関する良質かつ最新の入門書は、Higham の *Critical Issues in Ecotourism: Understanding a Complex Tourism Phenomenon* と Fennell の *Ecotourism: An Introduction* 最新版がある。国際エコツーリズム協会 (The International Ecotourism Society) のウェブサイトには学生にとって有用な資料が掲載されている。

【推薦図書】

Fennell, D. (2003) *Ecotourism: An Introduction*, 2nd edition. London: Routledge.

Higham, J. (2007) *Critical Issues in Ecotourism: Understanding a Complex Tourism Phenomenon*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

Zeppel, H. (2006) *Indigenous Ecotourism: Sustainable Development and Management*. Wallingford: CABI.

【小槻】

【倫理的ツーリズム (Ethical Tourism)】

倫理的ツーリズムは、ツーリズム産業とツーリストの両者に対し、行動の倫理的影響を考慮し、目的地において悪弊の一助となるような活動に参加しないよう促すことを主な目的としてきたツーリズムの一形態である。

最も広い意味において、倫理とは、哲学研究の一要素であり、何が正しく、何が誤っているかに関するものである。ツーリズムに関するビジネスおよび実践に対して倫理が適用されるようになったのは、かなり最近のことであり、倫理的ツーリズムは、しばしば**持続可能なツーリズム (sustainable tourism)** および**エコツーリズム (ecotourism)** という概念と強い結びつきをもつ。両者は、ツーリズムがより広いコンテクストに対してもたらすかもしれない影響に焦点をあてたものだからである。それゆえ、倫理的ツーリズムは、環境、ホスト・コミュニティ、従業者に対して、倫理的にふるまおうと努力するツーリズムの一形態であると言える。

倫理学は、伝統的には理論的な学問と見なされてきたが、この40年、より応用的に使われるようになってきており、はじめに、権力の濫用とスキャンダルに対する応答としてのビジネス倫理を挙げることができる。「その結果、応用倫理学は、ビジネスにおいても社会全体においても、人間の福祉と発展に関する多くの重要な分野、すなわち、ビジネス、法曹、医療、生物圏、環境、そしてツーリズムを包含するものへと徐々に発展してきた」(Fennell, 2003: 177)。

ツーリズム倫理は応用倫理学の一部門と考えられているが、それは、この学問への理論的アプローチを理解するのに役立つ。大雑把に言って、倫理学の理論には二つのアプローチ、すなわち義務論と目的論があるのだ。

《義務論》(Deontology) は、人間にとっての《正しい行い》(right behavior) についてのもので、神学上の教説や社会契約に由来するだろう諸規則に基礎を置いたものである。それゆえ、倫理的行動は、義務を果たすこと、適切な手順に従うことと結びついている。

それに対して、《目的論》(Teleology) は、諸規則

に基礎を置くのではなく、どのような手段によってであれ、可能な最善の結果を確保することに基礎を置き、《良い行い》(good behavior) についてのものである。目的論には、快楽主義と功利主義という二つの理論が含まれる。快楽主義は、個人にとっての最大限の快に関心があり、功利主義は、最大多数の最大幸福を得ようとする。これらの理論的アプローチは、後に示すように、ツーリズムに関するビジネス、ホスト、訪問者についての研究に光をもたらす。

研究者たちは、ツーリズム産業と学者たちが、ツーリズムの「影響」(impacts) とりわけ、環境への影響に専念するあまり、倫理の重要性を把握するのが遅かったと考えている (Fennell, 2003, 2006)。イギリスに本拠地をもつ慈善団体「ツーリズム・コンサーン」(Tourism Concern) は、より倫理的なツーリズム産業にするためのキャンペーンにより、この事態を是正してきた。キャンペーンが問題としてきた範囲は、環境へのダメージだけでなく、文化の衝突、排気量、水の無駄遣い、労働条件、女性からの搾取、子どもを対象としたセックス・ツーリズムにまで及ぶ。一例を挙げると、「ツーリズム・コンサーン」は、年間 100 万人を超える子どもたちがツアーリストによって性的虐待を受け、数百万人の若者がツーリズム関連の労働において搾取されているという報告をしている。あるいは、東南アジアにおいて、ゴルフコースの芝の維持のために、地元のコミュニティに必要なはずの大量の水が使われていること、国立公園やツアーリスト向けのリゾートを開発するために、多くの民族が、その土地から強制的に退去させられていることを報告している (Tourism Concern, 2008)。

しかしながら、上記のように極めて明白な悪弊があるにもかかわらず、ツーリズムへの倫理の適用は、ツーリズム産業が極端に細分化されており、多様な利害関係者がいるために、非常に難しいも

のであるとされてきた。何が倫理的行いを構成するのかについての態度は、ツアーリスト、ツアー運営者、ホスト・コミュニティによって異なるものであり、国際的ツーリズムは異なる文化的・宗教的信念体系にさらされることを余儀なくされるため、ツアーリストが目的地において、どの価値体系を適用すべきかは、必ずしも明確ではないのだ。これらの問題に取り組む試みにおいて、倫理的行為にかんする多様な規準が、ツーリズム産業、政府、民間団体によって、ツアーリスト、ホスト、政府、ツアー運営者の利益となるよう開発されてきている。Malloy and Fennell (1998: 454) によれば、そのような行動規準は、「特定のコンテキストにおいて許容される／許容されない行いを個人向けに知らせるためのものであり」、近年、ツーリズム産業の内外おける多様な倫理的違反への反応として開発されている。

Goodwin and Francis (2003) は、行動規準を二つのカテゴリー、すなわち倫理規準 (価値基準に基礎) と行動規準 (特定の状況下における実際上の行動に関連) へと分けることを提案している。以下に、広範囲の行為主体、当局、関心をもつ人々を示すために、最近のツーリズムに関する行動規準の事例をいくつか挙げる。

- ・ 「旅行およびツーリズムにおける性的虐待から子どもたちを守るための行動規準」(ECPAT (*訳注1)、ユニセフ、世界観光機関)。この規準は、国際機関によって作られ、多くの利益集団を対象としている。
- ・ 「ツアーリスト・ガイドの行動および倫理規準」(南アフリカ共和国西ケープ州政府)。この規準は、地方政府によって作られ、ツアー・ガイドのみを対象としている。
- ・ 「北極圏へのツアーリストのための行動規準」(WWF (*訳注2))。この規準は、北極圏へのツアーリストを教育するためのグローバルな自然保護団体により作られた。そこには、生物多様

性と地域の経済・安全を持続的に保全することへのアドバイスが含まれている。

これらのような、課題・産業・地域に関する規準に加え、現在、国際的ツーリズム産業は、2001年に世界観光機関（WTO^(*)）によって策定されたグローバルな倫理規準をもっている。これは、「ツーリズムの発展に関する利害関係者、すなわち国内外の訪問者だけでなく、中央および地方政府、地域コミュニティ、ツーリズム産業とその専門家に助言を与えることを目的とした総合的な原則集」として書かれている（WTO, 2001）。この規準は、倫理的課題の範囲を順序だてて説明する9つの論文と、実行の手順を説明し、WTOの「ツーリズム倫理についての国際会議」での論争に言及した最後の論文からできている。これには、次のものが含まれる。すなわち、ツーリストと現地の住人の関係、ツーリストの満足と充足感、持続可能な発展、文化的遺産の増進、現地コミュニティを含め、目的地とその利害関係者の利益を最大化すること、ツーリストの移動の自由、ツーリズム産業への従事者の権利である。

現在、多くの倫理的ツーリズムの行動規準が存在しており、陳腐すぎるとか、一般的すぎるとか、包括的すぎて適用しにくいといった批判にさらされている（Malloy and Fennell, 1998: 454）。たしかに、倫理的規準がうまくいくためには、行動を支配する諸規則に従うことのできる、非常に意欲的な消費者が必要とされよう。ところで、倫理的ツーリズムへの消費者の態度はどのようなものだろうか。明らかに近年、倫理的な消費者運動が台頭している。それは、スーパーマーケットにおける公正取引商品への人気の高まり、ファーマーズ・マーケットや地元生産品への関心の増加に伴ったものである。多くの消費者調査が、倫理的ツーリズム消費への態度を確かめるために行われている。それらの調査は、行楽客の多数派は、価格・気候・快適さ・便利さによって行き先を選んでい

るとはいえ、増加しつつある少数派は、行き先の倫理的課題やツアー運営者の倫理的適性に関心を示している（Mintel, 2005 and 2007）。Mintelの2005年の報告は、旅行人口の17%は「倫理的ツーリスト」に分類することが可能であることを示唆しており、より最近の報告では、責任能力をもつ旅行市場が、年間25%ずつ成長すると予測している（Mintel, 2007）。

2007年のMintelの報告は、さらに、回答者の9%が将来の休暇において、援助・保全プロジェクトにボランティア参加したいと答えたことを明かしている。見かけ上、賞賛に値する概念ではあるが、ボランティア・ツーリズムは、参加者のエゴイズムや協賛組織ゆえに批判されてきた経緯もある。参加者は、単に履歴書に記入するためのギャップ・イヤーの冒険を探しているだけであり、また、協賛組織はマーケティングおよび経営者と合体する傾向を強めているのだ、という批判である（Weaver, 2006）。

規模の大小問わず、倫理的消費者を対象とした休暇を商品とするツアー運営者は他にもたくさん存在する。たとえば、2001年に立ち上げられた「レスポンシブル・トラベル」のウェブサイトには、倫理的行動への特定の基準、すなわち環境ポリシー、社会的ポリシー、政治的ポリシーに沿った形の270ものツアー運営者が掲載されている（Responsible Travel, 2008）。

【読書案内】

David Fennellの2006年のテキスト、*Tourism Ethics*は、この分野の研究への導入として最良のものである。さらに興味のある読者は、フィールドにおける最新の調査を*Journal of Sustainable Tourism*で調べるとよい。The Responsible Tourismのウェブサイトは、産業的視点から見た倫理的課題という意味で興味深く、Tourism Concernは国際キャンペーンについての有用な情報源である。Patullo and Minneliの*The Ethical Travel Guide* (2006)は、倫理的ツーリズムの目的地や諸活動についての多くの例を提供している。

【推薦図書】

Fennell, D. (2003) *Ecotourism: An Introduction*, 2nd edn. London: Routledge.

Fennell, D. (2006) *Tourism Ethics*. Clevedon: Channel View.

Weaver, D. (2006) *Sustainable Tourism: Theory and Practice*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

(訳注1) 日本法人名は、「ストップ子ども買春の会」。日本法人名には入っていないが、ECPATのTは、Trafficking (子どもの密売買) である。

(訳注2) 「世界野生生物基金」。1986年に改称され、現在では「世界自然保護基金」(略称はWWFのまま)。

(訳注3) 2005年に国連の専門機関となって以降、略称はUNWTOを用いている。

【伊多波】

【e - ツーリズム(e-Tourism)】

e - ツーリズムは、パック型旅行・飛行機チケット・ホテルの予約や観光情報の提供など、ツーリズム部門内の諸活動への新技術の応用を指す。

新たな情報技術、特に情報の加工・分析・貯蔵・検索・拡散のメカニズムとしてのコンピューターネットワークやインターネットは、1990年代以来ツーリズムを変容させてきた。Buhalis(2003)によると、これらの技術は“ツーリズムの消費者と供給者とのコミュニケーションを強化し、需要と供給とに関する意識を高め、距離や文化的ギャップ・コミュニケーション上のギャップを小さくする架け橋に力を与え、それと交渉し、またそれを発展させてきた。”

ツーリズム産業で使用される現在の技術は、1950年代に航空会社がスケジュール管理や各航空線の予約管理の為に開発したコンピューター予約システム(CRSs)を端緒としている。この技術

はグローバルな流通システム(GDSs)が無数の航空機や乗客の詳細に関する情報を管理する為に開発されはじめた1970年代まで使用された。GDSsの操作ライセンスは旅行代理店に売られ、1987年ヨーロッパでGalileoシステムやAmadeusシステムが使用され始めた。GDSsはツーリズム産業のグローバル化において極めて重要な役割を果たし、世界中のツーリズムが生まれる主要地域にある多くの旅行代理店は4つの主導的なGDSs—Amadeus, Galileo, Sabre, Worldspan—へと結びつけられた(Page and Connell,2006)。勿論、これらのGDSsが開発されるのと同時期に、インターネットやWWWも開発中であった。インターネットとWWWはしばしば相互に交換可能であるかのように使用されるが、技術的に言うとインターネットがコンピューターのグローバル・ネットワーク(ハードウェア)を指すのに対し、WWWはインターネットを使用可能にするソフトウェアのことを言う。

ツーリズム産業の伝統的な諸部門は(例:航空会社、ハイヤー会社、ホテル、ツアー・オペレーター、旅行代理店、観光目的地を管理する組織など)、今や彼らの業務をオンライン上に移している。彼らは情報通信技術とインターネットが多くの便益をもたらすことを理解したのだ。これらの便益とは、内部効率性を向上させる機会、消費者と直接交渉する機会、より個別化された製品を提供する機会、販売ポイントの増大による販売地域の地理的拡大の機会を含む。インターネットはまた最後の瞬間まで製品を販売する為の理想的環境を与える。ツーリズムへのこれらの伝統的参加者とともに、格安航空会社などツーリズム産業への新規参入者も1990年代半ば以降インターネットのポテンシャルを活用できた。今やEasyJetなどの会社は飛行機チケットをオンライン上でのみ販売している。

ツーリズムの提供するサービスの不可視性故に、消費者は販売時点で製品を調べることができない。

故にツーリズム産業とその消費者は上質な情報に大きく依存している。「消費者のニーズに関するタイムリーで正確な情報が、しばしばツーリストの要求を満足させる鍵となる」と Buhalis は言う。

(Buhalis,1998:411) WWW をこれほど上手くツーリズムの環境へ適合させたものは、情報への即座のアクセスと相互作用的環境を提供するこの能力である。この技術をこれほど意味深くしているものとしては、ツーリズムのサプライヤーにより制御される CRSs や GDRs などの他の情報技術と異なり、インターネットが全ての者に開かれている点もある。これが意味するのは、消費者が直接ツーリズムのサプライヤー（例：航空会社やホテル）の所に行き、旅行仲介者—ツアー・オペレーターや旅行代理店—を必要とせずに製品を買うことが潜在的に可能だということだ。彼らは快適な自宅で旅行代理店の営業時間を気にせずに、個人向けに仕立てられたパッケージを組み立てることができる。2008年時点で前年度比7%増の65%の家庭がインターネットへのアクセスを有しているとの最近の政府統計が示していることから、ますます多くの人々が自分自身の旅行を独立してアレンジすることができるようになるだろう。

(National Statistics,2009a) これによりツーリズム産業における媒介排除が生じると考えられ、旅行代理店が余分なものとなることが懸念されていた。しかし実際に生じたのは、ツーリズムにおける電子媒介者の新種が生まれ消費者にサービスを提供するようになったこと（下記を参照）、伝統的旅行代理店が急成長の e - ツーリズムのビジネス環境におけるニーズに適応したことであった。Buhalis and Licata(2002)と Buhalis(2005)は、これらの新たなツーリズムにおける電子媒介者を以下のように概観している。

《シングル・サプライヤー》 (Single suppliers)
航空会社やホテルチェーンなどのシングル・サブ

ライヤーは、今やオンライン環境を自らの製品の流通の為のみならず、旅行保険やハイヤー手配や目的地情報の提供といった追加サービスの提供の為に活用している。

《旅行代理店》(Travel agencies)

Expedia.com や ebookers.com といったウェブベースの新たな旅行代理店が生まれ、オンライン上で様々な旅行製品を販売している。Thomas Cook などのオフラインの代理店もまたオンライン上に供給ラインを展開し、可能な限り広く潜在的消費者に接触しようとしている。

《ラストミニッツ・代理店》 (Last-minute agencies)

ツーリズム製品の持つ消滅性という性質が、last-minute.com のようなラストミニッツ・代理店の誕生を促した。この類の代理店は極めて短いリードタイム内に割引された旅行やギフト、経験すること自体が内容を為す製品を販売する。出発日が近づけば近づくほど消費者に可能な取引はより有利なものとなる。

《目的地管理組織》(Destination management organization)

これらの組織は（公的部門のものであれパートナーシップ型のものであれ）観光客の目的地の多様な機能を計画し調整する（目的地管理 [destination management] ^(*訳注1) の項を参照）。それらはますますウェブ上で目的地を売り込み、観光客への情報を提供し、その地域の宿泊やイベントの予約を容易化している。

それ故、e - ツーリズム時代は伝統的旅行代理店への新たな異議申し立てであり、これらのツーリズム媒介者内部における焦点の移動を促す。Mintel による最近の調査によれば、2006年から2008年の間で伝統的旅行代理店を通して予約を取った成人は2000人の内その25%である。18%は海外パック旅行の予約の為に旅行代理店を使い、7%は飛行機と宿泊の予約の為にのみ代理店を使った。旅

行代理店を使った人々の内、最多数を占めたのは ABCI 社会一経済的集団であり、子供を伴わない消費者だった。彼等の多くは 25 歳～34 歳、或いは 55 歳～64 歳の年齢層に入る傾向にあった。

(Mintel,2008) またこの報告によれば、消費者は旅行代理店を情報源として利用していた。19%はパンフレットを見たり旅行のオプションについてスタッフに尋ねたりする為に代理店を訪れていた。故に消費者は、個別の飛行機チケットや宿泊先の予約の為に旅行代理店に相談することには乗り気ではないが、海外パッケージ旅行の予約の為に代理店を使う傾向にあるようだ。これは、英国のますます多くの家庭がインターネットへのアクセスを有するようになりつつあるが、オンライン上での旅行購入にまだ何らかの障壁が見出されていることを反映している。Page と Connel によると、これらの障壁の内にはオンライン上の小売業者の信頼性、提供される情報の正確性、オンライン決済を巡るセキュリティ問題が含まれる。(Page and Connell,2006)

インターネットはまた消費者の間で広く、目的地探索や値段比較、TripAdviser.com のようなオンライン上にある消費者によるフィードバック・サイトへの相談に利用されている。と言っても彼らが実際にオンライン上で予約を行うわけではない。これは旅行代理店、特に高品質な情報と独立したアドバイスを与える代理店にはまだ役割があることを示唆する。Mintel はこう考える。その役割は「ライフスタイルの導師としての中間者に近い存在である。高品質市場向けの旅行代理店は、高い要求を持ちつつもそれを自分自身で手配する時間や意思を持たず、高品質な個人向けの気配りに対して支払う能力と意欲を持つ人々向けの贅沢なサービスの提供者として自らを位置づけることがますます可能となってきた。」(Mintel,2008:4)

e-tourism の時代が来たことは明らかだ。情報技術はツーリズム製品の流通に革命をもたらし、消

費者はそれにより旅行計画に関して大いなるフレキシビリティと独立性を経験できるようになった。2005 年、旅行は英国 e-ビジネス市場の最大市場の一つで、卸売、小売、ケータリング、旅行商品への支払いに関して言うと、各 100£ のうち 59£ が e-ビジネス市場で支払われた計算となる。

(National Statistics,2009b) インターネットへのアクセスの更なる広がりはこのを更に増大させるだろうが、情報技術が全てのニーズに応えるのは不可能であり、十分に資格のある知識豊富な旅行の専門家の果たす役割は将来もあるだろうと考えられる。

【関連項目】目的地管理

【読書案内】

Dimitrios Buhalis が e - ツーリズムの分野における主導的な学術的論者であり、彼の 2003 年の著作 *eTourism* が良い入門書として推薦できる。O'Conner (1999)による *Electronic Information Distribution in Tourism and Hospitality* もまた参照されたい。

【推薦図書】:

- Buhalis, D. (2003) *eTourism*. Harlow: Prentice-Hall.
- Buhalis, D. (2005) 'Information technology in tourism', in C. Cooper, J. Fletcher, A. Fyall, D. Gilbert and S. Wanhill (eds), *Tourism Principles and Practice*, 3rd edn (1st edn, 1993). Harlow: Prentice-Hall. pp.702-36
- Buhalis, D. and Licata, M. C. (2002) "The future eTourism intermediaries", *Tourism Management*, 23: 207-20
- O'Conner, P. (1999) *Electronic Information Distribution in Tourism and Hospitality*. Wallingford: CABI

(訳注 1) 今回は訳出していない。

【原】

【映画 & TV ツーリズム (Film and TV

Tourism)]

「映画&TV ツーリズム」という用語は、テレビや映画の中に登場するロケ地を見ることで促される観光訪問を指す。このツーリズム形態はまた、映画やテレビのキャラクター或いはセレブリティと関係のある場所への訪問も含む。

映画やテレビといった大衆的メディアは消費者生活に多大なる影響を持ち、それは観光客による目的地選択にまで及ぶ。文学作品登場人物や作家が特定の場所へと観光客を惹きつけるように（文学ツーリズム [literary tourism] 参照）、大衆的テレビ番組や成功した映画も様々なロケ地の中からツーリズムの目的地を創り出している。このタイプのツーリズムは、それを「ムービー誘発型」(movie-induced) 或いは「フィルム誘発型」(film-induced) ツーリズムと捉える論者達により漸く近年に至り研究され始めた。(Beeton, 2005; Busby and Klug, 2001; Riley, Baker and Van Doren, 1998) 映画やテレビ番組は観光客を惹きつけるのに等しく影響力を持つが、両者が訴求する訪問客の類型やその影響力の持続性は異なる。長期間放映中のテレビのメロドラマの熱心なファンがそのロケ地と持つ関係は、最新のスペクタクル映画の鑑賞により或る地域を訪れるよう動機づけられた観光客がその土地と持つ関係とは異なる。同様に 1960 年以來放映されている英国の《コロネーション・ストリート》(Coronation Street) のような長寿番組は、一本の映画が持ちうる以上に長い期間にわたるロケ地へのテレビ誘発型ツーリズムを引き起こしてきた。

上記の定義が示唆するように、映画・TV ツーリズムは単にメディアの中で描かれたロケ地を訪れることに関わるのみではない。映画・TV ツーリズムには様々な主体と形式とがある。Beeton(2005) と Busby&Klug(2001)によると、以下のものが含まれる。

ロケ地で (On location)

- ・ 映画やテレビ番組のロケ地訪問：スコットランドのハイランド地方にある《グレンの王》(*訳注1) (Monarch of the Glen) の国、英国にある《ハリー・ポッター》(*訳注2) (Harry Potter) のロケ地
- ・ 映画やテレビに登場するセレブリティの家を巡る観光：「ハリウッド・スター達の家」(Hollywood Homes of the Stars) 観光

商業的アトラクション (Commercial attractions)

- ・ 映画を主題とするアトラクション：英国のホイットビーにある《ハートビート・エクスペリエンス》(*訳注3) (Heartbeat Experience)
- ・ 様々な映画ロケ地へのガイドツアー：ニューヨークでの《セックス・アンド・ザ・シティ》(*訳注4) (Sex and the City) ツアー、オーストリアのザルツブルグでの《サウンド・オブ・ミュージック》(*訳注5) (Sound of Music) ツアー
- ・ 映画に関するパックツアー：《ロード・オブ・ザ・リング》(*訳注6) (Lord of the Rings) をテーマとするパックツアー

設定上の舞台(Stand-in locations)

- ・ 映画やテレビ番組の、実際のロケ地ではなく設定上の舞台の訪問：《ブレイブハート》(*訳注7) (Braveheart) は、設定上の舞台はスコットランドだが、実際にはアイルランドで撮影された。

ロケ地以外の場所で(Off location)

- ・ 撮影プロセスを見物する為の映画スタジオへのツアー：ロスアンジェルスのパラマウントスタジオ
- ・ 映画を基礎とするテーマパーク：ロスアンジェルスのユニバーサルスタジオ

イベント (Events)

- ・ 映画のプレミアショーや映画祭：カンヌ、エジンバラ、ロンドン、ヴェネチア

アームチェア旅行 (Armchair travel)

- ・ テレビの旅行番組：BBC の《ポール・トゥ・ポール》^(*) (Pole to Pole) や《ザ・ロング・ウェイ・ダウン》^(*) (The Long Way Down)

メディアに基礎を持つ経験が上記のように多様である事実が示すのは、映画&TVツーリスト達は必ずしも類似した動機を持つ同質的集団ではないということである。或る観光客達にとって特定の場所を訪れることは巡礼に近い意味を持つ、一例えばモンティ・パイソン^(*)のファンは、《モンティ・パイソンと聖杯》(Monty Python and The Holy Grail) のロケ地であるスコットランドのドゥーン城を訪れる際、殆どスピリチュアルと言える経験を持つ (Beeton, 2005)。他の訪問客達は、人気の《セックス・アンド・ザ・シティ》(Sex and the City) ツアーがニューヨークの女性グループのショッピングやランチに関する生活の短縮版であることから解るように、特定のセレブリティや番組内で描かれた生活が持つ魅力故に、或る場所に惹きつけられているのかもしれない。他の者達はより感情的レベルで或る場所に同一化しうる (例えば 1970 年に人気を博した子供向け映画《ザ・レイルウェイ・チルドレン》^(*)

[The Railway Children] のロケ地訪問により喚起されるノスタルジー)。また他の者達は一般的関心から幾つかの場所を訪問する。例えばヨークシャー地方への観光客達は、広くその州全体を訪問すること一部分として、《ハートビート》(Heartbeat) や《ラスト・オブ・ザ・サマーワイン》(Last of the Summer Wine)^(*)、またはジェームズ・エリオット^(*)の国を自分が訪れていることに気づくかもしれない。

メディア・ベースト・ツーリズム(media-based

tourism)から利益を得ようとする多くの地域は、撮影場所としての利用を促進し、その結果制作された作品を公表する目的で、ツーリズム関連機関と地域のフィルム・コミッションとの間にパートナーシップ関係を構築してきた。ロンドンフィルム・コミッション、フィルム・ロンドン、ロンドン・ツーリズム機関、ビジット・ロンドン、その他様々なロンドンの行政区は、最近の多くの映画の中で重要な舞台となった首都ロンドンに在るロケ地を掲載した映画マップシリーズを作成し宣伝してきた。同様に、英国のツーリズム当局の最も成功した出版物は“英国・映画マップ”で、1996年にパンフレットの形で初めて公刊され、後には双方向的ウェブサイトとなった。

デスティネーション・マーケティング(destination marketing)技術に関するこれらの事例は更なるツーリズム活動に繋がり、それが次に一連のポジティブな或いはネガティブなインパクトをもたらす。全てのツーリズム活動は利益と問題点をもたらすが、映画・TVツーリズムはこの訪問形式特有の一連の効果を目的地にもたらすと考えられている。メディア・ベースト・ツーリズムは、或る地域に追加収入と仕事ををもたらすことができ、特にお土産やキャラクター商品、またテーマに沿ったツアーやサービス等のスピンオフサービスを販売する機会をもたらす。《フル・モンティ》(The Full Monty)^(*)の人気向上により思いもよらぬ形でツーリズムの目的地となったシェフィールドという街の場合のように、その地域のプロフィールも向上しうる。Kim et al.(2007)は、休暇の目的地として韓国を選ぶ日本人訪問客を増やす役割を持ったものとして、韓国のテレビシリーズ《冬のソナタ》(Winter Sonata)^(*)を挙げる。

成功した映画やテレビ番組はまた、デスティネーション・マーケティングに関して一つの国や地域を支援しうる。ニュージーランド政府は《ロード・オブ・ザ・リング》(Lord of the Rings)三部作

を国家的ツーリズム・キャンペーンに使用するのに極めて積極的で、フィルム誘発型ツーリズムからの多額の利益を最大化する為に、「ロード・オブ・ザ・リング担当大臣」(Minister of the Rings)さえも任命した。(Beeton, 2005)しかしこのような成功は必ずしも保証されうるものではなく、Frost (2004) は、2003年の映画《ネッド・ケリー》(Ned Kelly) (*訳注16)からの収益を期待したオーストラリアのヴィクトリア地方における不成功に終わった試みに関する事例研究で、この点を記述している。

幾つかの目的地がメディアに関係するツーリズム(media-related tourism)を最大化する為に活発に介入する一方、自らがフィルム・ベースト・ツーリズム(film-based tourism)のブームの中心であることに気づき驚く地域も存在しうる。この形のツーリズムは計画するのがしばしば難しい為、持続不可能なほどの観光客に晒されていることに地域が気づく場合も存在する。これは結果として環境破壊や、受け入れ側コミュニティのプライバシー侵害、或いは伝統的に観光客を受け入れていた場所の望ましくない変化をもたらすかもしれない。スコットランド西部諸島のマル島にあるトバモリーという小さな漁港は、人気のある子供向けテレビ番組《バラモリー》(Balamory) (*訳注17)のセットとして使われた際、極めて特殊なツーリズムのブームの中心となったことに気づいた。この小さな島の諸施設は多数の家族連れには不向きなものだったので、ツーリズムの経営者達は気まぐれなものとなるかもしれない市場を満足させる為に彼らの売り物をしぶしぶ変容させた。

(Connell, 2004, 2005) 映画やテレビに基礎を持つツーリズムは長続きしない可能性もあるので、過ぎ去る流行となるかもしれないものの上に長期計画の基礎を置くのは賢明とは言えないだろう。現実の撮影プロセス自体も環境にインパクトを与えうるもので、《ザ・ビーチ》(The Beach) (*訳注18)の撮影に使用されたタイの浜辺はその一例であ

る。そこにはブルドーザーが入り、製作チームの必要性を満たす為に浜辺が拡張された。(Beeton, 2005)この映画はまた、かつては汚れを知らなかった地域へと、浜辺の経験を通し冒険とロマンスのスリルを味わいたいバックパッカー達の終わりなき流れを導き入れることとなった。

私達は既に、映画やテレビ番組が様々なタイプの観光客を目的地へと導く点を見たが、それはまたツーリスト達に変わった行動を取らせることもできる。世界遺産でもあるカンボジアのアンコールは、コンピューターゲームをベースとするアドベンチャー映画《トゥーム・レイダー》(Tomb Raider) (*訳注19)のロケ地として使われた。その場所では、フィルム誘発型(film-induced)ツーリスト達がヒロインであるララ・クロフトを模倣する為に古い寺院の壁を登るのが確認されている。この類のメディアへの露出はその場所の保存計画と両立しないものと考えられる。(Winter,2002)訪問客の不適切な行動は、お土産として場所の一部を実際に持ち帰ってしまう行動にまで進みうる。繰り返し、道路標識やその他の象徴的アイコンとなる事物が映画やテレビのロケ地から持ち帰られている。

最後に、文学ツーリスト(literary tourists)でも同様だが、ロケ地を訪れた観光客の中には訪問先で知覚する**真正性(authenticity)**に関して失望を感じる者もいるかもしれない。大変人気のある映画《ノッティングヒルの恋人》(Notting Hill) (*訳注20)で描かれたロマンチックなロケ地を、同じ名前を持つロンドンの実在の通りで見つけようとすることは極めて難しい。

シミュレーションされたイメージ、メディア・ベースト・ツーリズム(media-based tourism)のはかなさ、リアリティと幻想との区別の不明瞭化、セレブリティの役割といった事柄の重要性により、論者の中には映画・テレビツーリズムを**ポスト・ツーリズム(post-tourism)**の明らかな事例だと言う者もいる。現代のポストモダン文化、その中を

ポスト・ツーリスト達が動き回るわけだが、そこでは現実の場所が商品化され、常に存在するツーリストのまなざし (tourist gaze) に消費されるスペクタクルへと変貌する。その時、観光客達はロケ地を巨大な映画スクリーンであるかのように見なしているのだ。

【関連項目】アート・ツーリズム、真正性、文化ツーリズム、文学ツーリズム、ポスト・ツーリズム

【読書案内】

Sue Beeton の *Film-induced Tourism* は映画・TV ツーリズムに関する最初の持続的探究であり、この分野への極めて有用な入門書である。多くの事例研究は以下に挙げた雑誌論文の中に見出すことができ、メディアに基礎を持つツーリズムに関連する幅広い理論的・実践的問題を扱っている。Tony Reeve の *The Worldwide Guide to Movie Locations* (2003) と、ウェブサイト “www.movie-locations.com” は映画・TV ツーリスト達向けの映画に関連する目的地を詳細に知るのに役立つ。

【推薦図書】

Beeton, S. (2005) *Film-induced Tourism*. Clevedon: Channel View.

Busby, G. and Klug, J. (2001) ‘Movie-induced tourism: the challenge of measurement and other issues’ *Journal of Vacation Marketing*, 7(4): 316-32

Riley, R., Baker, D. and Van Doren, C.(1998) ‘Movie induced tourism’, *Annals of Tourism Research*, 25(4): 919-35.

(訳注1)「グレンの王」は2000年から2005年にわたり第7シリーズまで放映された英国BBC制作のドラマ

(訳注2)「ハリー・ポッター」は英国の作家J・K・ローリングによるファンタジー小説。映画化もされている。

(訳注3)「ハートビート」は1992年から2010年まで放映された英国の刑事ドラマ

(訳注4)「セックス・アンド・ザ・シティ」は1998年から2004年まで放映されたアメリカの連続ドラマ

(訳注5)「サウンド・オブ・ミュージック」は1965年公開のミュージカル映画

(訳注6)「ロード・オブ・ザ・リング」はトルキンの『指輪物語』を原作とする実写映画シリーズ

(訳注7)「ブレイブハート」はメル・ギブソン主演・監督による1995年のアメリカ映画

(訳注8)「ポール・トゥ・ポール」は北極から南極への旅を描いた英国BBC制作のテレビドキュメンタリー

(訳注9)「ロング・ウェイ・ダウン」はスコットランドから南アフリカまでのバイクの旅を描いた英国BBC制作のテレビドキュメンタリー

(訳注10) モンティ・パイソンはイギリスを代表するコメディ集団。映画「モンティ・パイソンと聖杯」は1975年公開

(訳注11)「ザ・レイルウェイ・チルドレン」は同名小説を原作とする英国の1970年公開の映画

(訳注12)「ラスト・オブ・ザ・サマーワイン」は1970年代から2000年代にかけて英国BBCで放映されてきたホームドラマ

(訳注13) ジェームズ・エリオット (James Herriot, 1916-1995) は英国の作家。半自伝的作品で知られる。

(訳注14)「フル・モンティ」は1997年制作の英国映画。ハートフルコメディ。

(訳注15)「冬のソナタ」は2002年韓国KBS制作のドラマ。日本でも2004年の流行語の1つとなった。

(訳注16)「ネッド・ケリー」は2003年のオーストラリア映画。日本未公開。

(訳注17)「バラモリー」は2002年から2005年にかけて放映された英国BBC制作の子供向け番組

(訳注18)「ザ・ビーチ」はレオナルド・ディカプリオ主演の2000年のアメリカ映画

(訳注19)「トゥーム・レイダー」は2001年のアメリカ映画

(訳注20)「ノッティンガムの恋人」は1999年のアメリカ映画

【原】

〔アイデンティティ (Identity)〕

アイデンティティは、個人的、集团的、あるいは民族としての自分自身をどのように捉えるかに関わるものである。これは、あらゆる価値体系とイデオロギーに形を与えるものであり、どこへどのように旅するか、また、なぜ旅するのかということに影響を与える。

アイデンティティは、固定的でない概念であり、それは特にポストモダンのグローバル時代において言えることである。グローバリゼーションとバーチャルな時間・空間の押し寄せは、個人的・集团的アイデンティティに対して極めて大きな影響を及ぼしてきた。ネットワーク社会において、[1] 領域に関する物理的境界線がぼやかされたことによる可動性、流出、流入、[2] 地理的・政治的再編、[3] 自発的にせよ強制的にせよ、個人の移動、[4] 情報と資本の流れ、これらは、社会および社会的組織の多様なレベルにおいて、アイデンティティの再定義を誘発している。

Sarup (1996) は、アイデンティティ構築が、どのように、社会化理論や役割理論のような諸理論 (*訳注1)、イデオロギー (たとえば、国家装置 (*訳注2))、言説理論、自己に関する規律訓練やテクノロジーといったものに基づいているかを述べている。単一的なアイデンティティなるものではなく、それは、多様で雑種的なものである。Sarup は、より伝統的なアイデンティティ構築についての理論が、階級・ジェンダー・人種の力学と、いかに密接に結びついていたのかについても述べている。しかしながら、心理学的・社会的な諸要因の複雑性もまた、考慮に入れなければならない。

ツーリズムとアイデンティティの関係は、いくつかの研究の焦点となってきたが、たとえば、Lanfant ら (1995) の次のようなものを挙げることができる。

ツーリズム、とりわけ「文化ツーリズム」は、国際機関によって、新しいアイデンティティを生み出しうる教育的な手段だと考えられている。それは、形成途上にある、多民族的、多国家的な配置と結びついたアイデンティティである。(1995: 4)

Lanfant は、アイデンティティの形成がどの程度までイデオロギーに動機づけられているかを問うている。しばしばツーリズムは、帝国主義的・覇権主義的権力として描写され、アイデンティティは他のものと同様、パッケージ化され、製品となり、市場取引されるものとなっている。Lanfant が論じるように、アイデンティティの大多数は、他者との関係の中で構築されるのだ (自己と他者の項を見よ)。アイデンティティについての強い意識がない場合、ホスト社会は、商業主義の誘惑に屈服し、自らの伝統を見失うだろう (Hart Robertson, 2005)。

Burns (2005) は、ツーリズムの文脈における社会的アイデンティティの創造について論じている。彼はサイドの『オリエンタリズム』(1978) を引用する。それは、人種や民族、エスニシティーについての知覚が、「他者」についての過度に単純化され、ステレオタイプ化した視点を生む可能性を指摘した。旅行産業の中で用いられる、商業向けに作られたアイデンティティは、しばしばこの種のステレオタイプに基づいており、暗黙のうち、場合によっては公然と人種差別的で、搾取的になりうる。さらに、それらはツーリストの幻想に対応し、過度に単純化され、理想化されたイメージを与えもする (セックス・ツーリズム (Sex Tourism) の項を見よ (*訳注3))。その後の著作において、Burns and Movelli (2006) は、ツーリズムとツーリストについての批判的言説について、社会的・文化的アイデンティティとの結びつきという観点から論じている。その議論は、ツーリス

ムが行われ、文化、民族とその歴史、ライフスタイルがツーリズム関連商品の一部となっているような複雑な社会環境についても論じている。そして、このプロセスのもつ意味がツーリズムを扱う文学およびツーリズム研究において充分には理解されていないと論じている。すなわち、文化は、一方において、ツーリズムに「影響を受ける」(impacted) 傷つきやすい固定的なものとして描写され、他方においては、活発で、グローバリゼーションや近代的動向に容易に対処できるものと捉えられるのだ。明らかに、それは文脈、すなわち、目的地が自らのアイデンティティに対する脅威にどれくらいうまく対処できるのかに関する、ツーリズムの特性と場面とに強く依存していると言えるだろう。

Pitchford は、*Identity Tourism: Imaging and Imagining the Nation* (2007) の中で、民族的アイデンティティの構築におけるツーリズムの役割について検討している。その議論において、彼女は、歴史的・文化的語り (narratives) が、しばしば民族の物語を創造し、否定的・外的な知覚に逆らおうとすると述べている。このことには、何らかの媒介が必要とされるが、ツーリズムは、その一つと言える。アイデンティティ・ツーリズムは、エスニック・ツーリズムと遺産ツーリズムの両方を含んだものとして描写され、博物館、遺産センター、パフォーマンス他、集団的アイデンティティが表象され、解釈され、構築される、さまざまなアトラクションを含んでいる。

アイデンティティ構築という課題は、中欧や東欧のようなポスト社会主義国家、新たな国民国家 (旧ソ連やユーゴスラビアを含む) において、主要な関心事となってきた。このことは、特に、マーケティングおよびプロモーション用の印刷物を通じたイメージの投影を考えたとき、重大な意味をもつ。特に、社会主義の遺産が居住者たちにとっては好ましくないものであったとしても、訪問者にとっては魅力的であるといった場合に、文化

のどのような側面に焦点をあてることにするかは難しい問題だ。しかしながら、アイデンティティの創造は、単なる商業上のマーケティング実践よりもずっと大きな問題である。新しく、特徴的なアイデンティティを主張することは、高度に政治的な問題であり、複雑に絡んだ社会的・文化的な力と結びついたものである。

アイデンティティの形成と投影は、新植民地主義的諸国においても、とりわけ複雑なものである (新植民地主義 (neo-colonialism) の項を見よ)。国際的に先住民ツーリズム (indigenous tourism) の発展への関心が高まっており、有効に運営されるならば、それは原住民文化の文化的伝統およびアイデンティティに再び活力を与え、強化する手段として見るができるであろう (これは、オーストラリア、ニュージーランド、北米、アジアおよび中南米の一部といった、多くのネイティブ・コミュニティにおいて当てはまることである)。多くの原住民たち (とりわけ若者) は、ツーリストによる関心をうけて、自らの文化的伝統およびアイデンティティを再発見している。

Castells (1997) は、個人的・集団的双方のレベルにおけるアイデンティティの構成体を三つのタイプに分けている。一つは、「正統化された」アイデンティティ ('legitimising' identity) と呼ばれるものである。それは、トップダウン型のもので、支配的制度ないし国家機関によって導入され、その権威と支配を拡張し、正当化するためのものである。場所 (や人々) は、強い/弱い、中央の/周縁のアイデンティティをもち (ということは、投影されたマーケット・イメージをもち)、それは、政治的状況および権力の実体的な支配、世界レベルでの正統性と権威とに依拠している。近代世界において、その場所が都市化されていればいるほど、そのアイデンティティと権力も中央的になる。そのような中央的アイデンティティは、記念碑やアイコンによって具体的で触知可能な表現を与えられる。それらは、権力を象徴するものであり、そ

の場所のもつ意味を表すものであり、さらには、ツーリストの生活環において、生きられる中心的な経験となる。少しかだけ例を挙げれば、自由の女神とホワイトハウス、エッフェル塔とヴェルサイユ宮殿、コロッセウムとヴァチカン、ロンドン塔とバッキンガム宮殿といったものである。1,000 *Places to See Before You Die* (Schultz, 2003) のような本は、これらの目的地にさらなる正統性を与えている。強力なアイコンとアトラクションをそなえた中央的な目的地は、見るべき場所についての支配的な世界観を促進することで、権威的なブランドイメージを手に入れており、それゆえ、ツーリストに、巡行における「マスト」('musts') として捉えられるのだ。

Castells (1997) によって定義づけられた二つ目の「アイデンティティ」は、中央/周縁の二分法の論理的副産物と呼べるものである。それは、「対抗的」アイデンティティ ('Resistance' identity) というもので、個人やコミュニティが主流からはずれ、中央的なものの方に対するオルタナティヴを主張し、中央的な生き方に対して、アイデンティティの政治 (identity politics) におけるマイノリティとしての圧力団体を形成し、といったところで生まれるものである。対抗的アイデンティティの定義は、必然的に、主流と関連したものとなり、「彼ら」と「我々」の間の差異を強調するものとなる。たとえば、スペインにおけるカタロニアやバスクが、この例にあたる。ときに、対抗的アイデンティティの主張が強すぎるあまり、ツーリストやツーリズムに対する脅威となることがあるだろう (たとえば、バスク地方での ETA による爆弾事件)。連合王国におけるスコットランドは、バルモラル城を含む、多くの城のような触知可能な遺産および、ネス湖の怪物や『ブレイブハート』(*訳注4) のような投影された触知不能の遺産をそなえ、イングランドに対する比較的ポジティブな対抗的アイデンティティをもっていると言える。対抗的アイデンティティには、他にも数多く

の例があり、たとえば、モンテネグロにおける民族的抵抗から、生物学的なもの、「ゲイ・プライド」のように、ジェンダー的なものに至るまで (ゲイ・ツーリズム (gay tourism) の項を見よ (*訳注5))、幅広いものが挙げられる。伝統的な性役割分担は、その意味をほとんど失っており (少なくとも、西洋においては)、ジェンダー・アイデンティティに関する流動性は、かつてと比べて、増大している。ジェンダー・アイデンティティの流動性の増大は、ツーリズムにおいて、女性による男性の買春 (セックス・ツーリズムの項を見よ)、ゲイ・ツーリズム、ピンク・ダラー・ツーリズム (*訳注6) (Pink Dollar Tourism) (ゲイ・ツーリズム (gay tourism) の項を見よ)、違いを表明することに関する「安全度」('safeness') にもとづくツーリズムの地理学の再編 (ツーリズムの地理学 (geography of tourism) の項を見よ (*訳注7)) といったことを生み出している。

Castells の定義によるアイデンティティ構成体のうち、三つ目のものは、「企図的」アイデンティティ ('project' identity) である。それは通常、対抗的アイデンティティから生じるものであり、たとえば、フェミニストのような個人が、家父長制と資本主義的生産の構造そのものの正当性を疑い、抵抗による定義 [つまり第二の定義] から、確立された秩序への疑いによる定義へと移行する場合である。別の規模においては、おそらく、ダライ・ラマが、企図的アイデンティティの格好の例であろう。戦争を通じた世界秩序とアイデンティティの正統化を疑い、平和と同情に根ざしたアイデンティティを提示するからである。ダライ・ラマが中国の統治に対する反乱に失敗してチベットを去ってから半世紀ほどしか経っていないにもかかわらず、ラサにある彼の宮殿は、近年、ツーリスト・アトラクションとして、多くの人を集めている。

ポストモダン社会は、社会的・地理的境界をぼやかし、個人のアイデンティティおよび関心が、何を消費するかによって決まる社会、商品が使用

価値だけでなく象徴的価値によっても測られる社会へと進んだ(たとえば、セレブリティやロール・モデルによって商品のアイデンティティが決まるような)。消費者のアイデンティティやライフスタイルは、時代および成熟度によって変化する(成熟社会のツーリズム(mature tourism)の項を見よ(*訳注8))。それは、目的地のイメージとアイデンティティが変化するのと軌を一にしている。ある人が、ツーリスト経験をバックパッカーから始め(Plogの用語で言い換えれば、アローセントリックな(allocentric)ツーリズム)、共同購入にせよ、単独購入にせよ、別荘の所有者(同じくPlogの用語で言えば、おそらく、サイコセントリックな(psychocentric)ツーリズム)へと至るということもある(*訳注9)。そのようにして、新しい経験に動機づけられた可動性から、本質的に安定と安全に基づいた可動性へと移行することもある。

消費者のアイデンティティは、サイバースペースと同様、国内外の境界をまたぐものである。それゆえ、ツーリストは、ヴァーチャルな空間においてでさえ(たとえば、ブログ・コミュニティ)、他のツーリストに強い影響を受けることがある。インターネットは、これらのコミュニティにおいて、関心の共有と相互の結びつきとを可能にし、テクノロジーとツーリズムを通じてのアイデンティティの再定義をも可能にする。それは、共有された知覚によって、目的地のアイデンティティに明確な形を与えるのと同様のものである。

【読書案内】

*Identity Tourism: Imaging and Imagining the Nation*におけるPitchfordの仕事、*Tourism and Social Identities*におけるBurns and Novelliの仕事は、ツーリズムの文脈の中で、とりわけ有益なものである。アイデンティティに関して、社会学・文化人類学ほかの分野において、豊富な資料が存在する。それについては、Sarupの*Identity, Culture and the Postmodern World*および、Castellsの*The Power of Identity*を参照のこと。

【推薦図書】

Burns, P.M. and Novelli, M. (2006) *Tourism and Social Identities*. Oxford: Elsevier.

Lanfant, M., Allcock, J.B. and Bruner, E.M. (1995) *International Tourism: Identity and Change*. London: Sage.

Pitchford, S. (2007) *Identity Tourism: Imaging and Imagining the Nation*. Oxford: Elsevier.

(訳注1) いずれも、社会学の用語。「社会化理論」は、子どもや、新たに社会の一員となる者が、社会における規範や価値体系を学習していくことについての理論で、「役割理論」は、社会における諸個人が相互に、特定の行動規範(役割)を期待することについての理論。

(訳注2) フランスの哲学者ルイ・アルチュセールの用語法を念頭に置いたものである。

(訳注3) 今回は訳出していない。

(訳注4) 1995年公開の映画。スコットランド独立のために戦った実在の人物、ウィリアム・ウォレスについての映画だが、フィクションの要素が強い。

(訳注5) 今回は訳出していない。

(訳注6) 「ピンク・ダラー」あるいは「ピンク・マネー」は、ゲイの人々の購買力を表す用語である。

(訳注7) 今回は訳出していない。

(訳注8) 今回は訳出していない。

(訳注9) allocentric/psychocentricは、次の文に書かれるように、ツーリズムに刺激・冒険を求めるか、平穏を求めるかの違いである。

【伊多波】

【先住民ツーリズム(Indigenous tourism)】

先住民ツーリズム(*訳注1)は、手付かずの自然地域で行われ、環境の保全、地元コミュニティの生活向上、訪問者の教育に努める旅行のことである。

旅行者が自然の中の居住地にいる地元の人々を

訪問する種類のツーリズムを説明するのに、「エスニック (ethnic) 」・ツーリズム、「部族(tribal)」・ツーリズム、「ネイティブ(native)」・ツーリズム、「アボリジナル(aboriginal)」・ツーリズムなどさまざまな用語が使われてきた^(*訳注2)。しかし、Butler と Hinch (2007)は、それらを包括する用語として「先住民」(indigenous) ツーリズムの語を使うことを選んだ。先住民は、自分たちの文化やアイデンティティにおいて、社会の主流にある主要集団とは明らかに違っていると説明される。彼らの伝統、言語、政治システムや制度、自然環境や領域への結びつきなどが挙げられるだろう。

先住民ツーリズムは通常、部族集団や少数民族など土着の(native)人々、つまり先住民の訪問を伴う。国立公園、ジャングル、砂漠、山岳地域などの場所、たいていは平均的なツーリストには簡単には近づけない、人里離れた、比較的不安定な場所で行われる。しかし、自然の居住地山岳やジャングルのトレッキング、雨林やサンゴ礁など特有の生態系への訪問、マウンテンゴリラやイルカ、クジラなどの野生動物を見に行く、サファリ・ツアーなど幅広いツーリスト活動を包含する。エコツーリズムはグローバルな現象であるが、世界には、エコツーリズムの目的地として好まれるようになった地域がいくつかある。たとえば、オーストラリア、コスタリカ、ベリーズ、ニュージーランド、ペルー、南極である。これらの地域が有名になったのは、特有の環境と野生動物が理由である。

先住民ツーリズムはさまざまな異なる形態をとるし、焦点となる活動も非常に多様である。たとえば、以下が含まれる。

- ・ 先住民エコツーリズム (たとえば、中米やアジアでの、ジャングル、熱帯雨林、山岳地帯で)
- ・ 野生動物やサファリ・ツーリズム (たとえば、マサイ族の住むケニヤやタンザニアの国立公園で)
- ・ 山岳部族ツーリズムとトレッキング (たとえば

タイやベトナムの村落で)

- ・ ベドウィン・ツーリズムや砂漠ツーリズム (たとえば、北アフリカや中東の砂漠で)
- ・ イヌイト・ツーリズム (たとえば、グリーンランド、カナダ、アラスカなど北極圏に近い国々で)
- ・ 村落ツーリズム (たとえば、南太平洋の島々で)
- ・ 保留地ツーリズム (たとえば、アメリカやカナダのアメリカン・インディアン保留地で)
- ・ アボリジニ・ツーリズムやマオリ・ツーリズム (オーストラリアやニュージーランドで)

これらが行われる環境の大半は壊れやすく、これらのツーリズム形態は重大な影響をもたらす。ツーリズムは先住民の自然居住環境だけでなく、生態系 (たとえば動物相、植物相) 全体を侵害する。環境には不可逆な変化が生じ、文化変容の過程で文化も影響を受ける。有力な文化(dominant culture) (この場合、ツーリストの文化) が影響力を持ち始め、地元の文化 (この場合、先住民の文化) に変化を引き起こす。ツーリストの地元文化への興味がその文化を支えるのに役立ったり、消滅しつつある伝統の復活につながることもあるが、地元の人々が彼らの運命の主導権を握っていることには留意しなければならない。

ツーリズムは、変化する先住民の生活様式の一要因にすぎない。鉱業、森林破壊、道路建設、内戦はすべて彼らの長期的な生存を脅かす要因である。また、彼らの多くは依然として人種差別、迫害、暴力を受けている。多くの先住民にとって、貧困、剥奪(deprivation)、社会的疎外などが、過去からの遺産として残ったままとなっている。先住民の問題は高度に政治問題化されている。というのも、大半のエスニック集団や部族集団は、ますますグローバル化が進む世界で自分たちの文化を存続させるために闘っているからだ。それも、通常は十分な政治的、法的な保護や支援を受けずに、である。それゆえ、彼らの利害を守るために、

多数の国際組織・国内組織が先住民のため、彼らとともに活動している。そうした団体の多くは、国際的な理解と支援を得るひとつの手段としてツーリズム開発を働きかけている。

Butler と Hinch は、 *Tourism and Indigenous Peoples* (1996) で主にツーリズムが先住民の生活様式や文化に与える影響に着目したが、2007 年の著作では前著作をさらに発展させ、現在はその関心を先住民のより積極的なツーリズム開発への参加に移している。もし地元の人々の主導権が最大化されるなら、コミュニティに基盤を置くツーリズム (community based tourism) ^(*訳注3) には、地元の先住民の政治的自決を増大させる可能性を与える形態がありうる。Zeppel (2006) は、先住民がしばしば文化的エコツアーやエコロッジ、狩猟漁労ツアー、文化村などの自然志向施設やサービスを運営している様子を描いている。これは彼らの自給自足的な生活様式を補完し、現金経済への移行を助けることができる。多くのそうした新規事業が先住民の手で創出、管理されており、彼らは単に底辺に置かれているばかりではない。

先住民ツーリズム開発への先住民の参加、管理の度合いは非常にさまざまで、開発が行われる文脈や地元や政府の支援の度合いに大きく左右される。先住民に観光地や観光アトラクションの支配や所有権が完全に与えられることはこれまでほとんどなかったが、協議や協力による管理、さらに単独管理への明らかな移行が生じている。協力的な措置は、先住民が平等なパートナーとして扱われる限り非常に有益でありうる。究極的には、大多数の先住民が、観光収入および取組の単独所有、単独管理に移行できるような、ある種のエンパワーメント ^(*訳注4) を模索していくことになりそうだ。でも、資金、教育、ビジネススキル訓練に関してはよりよい支援が必要とされている場合が多い。

先住民ツーリズムのツーリストは特徴が急激に変化している。かつてはアローセントリックな

(allocentric) (アイデンティティを参照) ^(*訳注5) ツーリスト、すなわち未開未踏の地を求める冒険的で勇敢な人々がそのほとんどだった。山岳民族トレッキング、山岳トレッキング、砂漠トレッキングなどの活動の多くは、今でも個人のバックパッカーが大半を占めている。でも今では、文化遺産、美術工芸、村落ツーリズムなど、他の先住民ツーリズム形態は、観光パッケージの主流に加わりつつある。実際、ケニヤやタンザニアなどの国では先住部族地域での野生動物ツーリズムがマスツーリズム現象となっている。

また、どこにでも文化公演や文化展示、美術工芸品市場がみられることも、ツーリズム商品としての先住民文化の重要性の高まりを示している。先住民文化のグローバル化もますます進んでいて、たとえば、アボリジニ・アートはインターネットでも販売されている。先住民の文化や美術工芸品に対する関心の高まりは、真正性 (authenticity) や商品化 (commodification) などの概念に関する重要な疑問を提起する。先住民の美術工芸品に対するツーリストの関心は、文化の継続性や伝統の復活を支えるが、芸術形態の真正性を危うくする可能性もある。先住民文化はしばしば、ツーリストに単純化した形式で提供する必要があり、単純化すれば芸術形態は犠牲になる。多くのツーリストは、地元の文化をちょっと試してみたいにすぎない。かなりの集中や驚異的な忍耐を必要とする長々とした舞踊、歌謡、音楽の上演は望んでいないのだ (たとえば、インドのヒンドゥー教寺院で行われるカタカリ舞踊は徹夜で上演される)。ツーリストは、ほとんどの場合、地元の言語を理解できないので、歌や劇の翻訳が提供されたり、ある種の解説が行われたりする。

しかし、多くの先住民ツーリズムのツーリストは美術工芸品の真正性を非常に重要と考えている。購入する製品が地元の職人の手で作られ、地元の特徴である伝統的な方法とデザインを反映したものであることを、彼らは保証してもらいたがる。

もちろんツーリスト向け土産品の商品化と大量生産は横行しているが、今では多くの職人が、地元の生産を守り、真正な製品を求めるツーリストを安心させるため、政府承認の鑑定印を使っている。地元の生産者を搾取から守るためにフェアトレードの取り組みも始まっており、地元の訓練ニーズがより強調されるようになってきている。

先住民の展覧会も、世界的に名高い博物館で展示されている。しかし、先住民のコレクションや展覧会の解説が、自分の扱っている文化や伝統を完全に理解しているかどうか分からない、先住民以外の人々の手に委ねられていることも多い。先住民の文化は、伝統的に博物館の展示のなかに化石化されるか、ノスタルジアとともに眺められてきた。つまり、活動的で進行中のものではなく、消滅、消失したものとして扱われてきたのだ。しかし、今では、博物館の展示には、先住民と植民地化の歴史の「真実」に焦点を当て、先住民の文化、伝統をより正確に提示、解説しようとする試みが増えている。

過去数十年間に、先住民の将来の存続に必要な、政治的、法的、経済的支援が先住民に徐々に与えられるようになってきた。死にゆく種とみなされるのではなく、復元力と活力に富む彼らの文化、伝統が高く評価される機会が増え、保護の必要も認識されている。土地利用はおそらく最も論議を呼ぶ未可決の問題だが、先住民の発展のための他の分野では大きな進展がみられる。ツーリズムは、経済的利益、保全の手段、文化伝統の保護と再活性化における変化をもたらす最も建設的な力とみることができる。地元のエンパワーメント、自己決定、自主管理といった重要な構想は着実に実行する必要があるが、もしツーリズムが責任をもって倫理的に運営されるなら、先住民の文化的存続に非常に貴重な貢献をできるだろう。

【関連項目】文化ツーリズム、エコツーリズム

【読書案内】

先住民ツーリズムは最近、いくつかの書籍や論部のテーマとなっている。Ryan と Aicken の *Indigenous Tourism: The Commodification and Management of Culture*、Butler と Hinch の *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications* などがある。これらの書籍には世界中の興味深い事例研究が多数掲載されている。Johnston (2005)もまた、*Indigenous Tourism: The Commodification and Management of Culture*のなかで、先住民ツーリズム開発にかかわる実務的な問題を多数検討している。「生存一部族民のための運動 (Survival- The Movement for Tribal Peoples)」という団体のウェブサイト (www.survival-international.org)にも言及しておきたい。

【推薦図書】

Butler, R. and Hinch, T. [eds] (2007) *Tourism and Indigenous Peoples: Issues and Implications*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

Johnston, A. (2005) *Is the Sacred for Sale? Tourism and Indigenous Peoples*. London: Earthscan Ltd.

Ryan, C. and Aicken, M. [eds] (2005) *Indigenous Tourism: The Commodification and Management of Culture*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

Zeppel, H. (2006) *Indigenous Ecotourism: Sustainable Development and Management*. Wallingford: CABI.

(訳注1) この訳では indigenous に「先住民」という訳語をあてた。窪田は、『先住民』という言葉は1980年代から盛んに使われるようになった、新しい用語である。英語圏において、それまでの native, aborigines に代わって indigenous という呼称が使用されるようになり、その訳語としてあてられた。」と説明している。後述される Hinch もこうした流れに従って indigenous の語を用いたと考えられる。この「先住民」という訳語について、内堀は indigenous は本来「現住民」と対応する言葉で「後先」という要素はなく、政治運動の文脈で選択されたことを指摘している。

窪田幸子(2009)「普遍性と差異をめぐるポリティックス—先住民の人類学的研究」窪田幸子、野林厚志編『先住民』とはだれか』世界思想社、(序論)、p1

内堀基光(2009)「『先住民』の誕生—indigenous

People(s)の翻訳を巡るパロディカル試論」前掲書、pp. 61-88

(訳注2) マイノリティ・ライツ・グループは、原住民を指す呼称は地域によって異なっていたとして次のように述べている。「ヨーロッパ人は南北アメリカ大陸に住んでいた人々をインディアン(Indian)と呼んだ。オーストラリアの先住民は、アボリジニ (Aborigine) と呼ばれた。アフリカやオセアニアでは「原住民」(native)という表現が一般的に使用された。」

・マイノリティ・ライツ・グループ、マイノリティ事典 翻訳委員会訳「Native People 先住民」、同編『世界のマイノリティ事典』明石書店、pp. 314-316

(訳注3) 江口信清は「コミュニティ・ベース・ツーリズム」、藤巻正己は「コミュニティ・ベースの観光」「コミュニティ・ベースのツーリズム」の訳をあてている。

・江口信清(2010)「社会的弱者と観光に関する研究」、江口信清、藤巻正己編『貧困の超克とツーリズム』明石書店、第1章、p. 21。

・藤巻正己(2011)「観光と政治」江口信清、藤巻正己編『観光研究レファレンスデータベース 日本編』ナカニシヤ出版、p. 121。

(訳注4) 矢澤はエンパワーメントを以下の通り説明している。「社会的経済的な力をもたない、貧しい人々や助成など、制度化された政治的・経済的過程に参加できず、人間開発の過程から排除され、力を奪われている(disempowered) 人たちが、自らの自己決定能力といった心理的な力や、社会的・政治的・法的な力を獲得する(自己をエンパワーする= self-empowerment) ことをいう。」(矢沢澄子「エンパワーメント」、庄司洋子ほか編『福祉社会事典』弘文堂、pp. 84-85) このdisempoweredと剥奪(deprivation)とは、ほぼ同義である。

(訳注5) [アイデンティティ] 訳注10を参照。

【小槻】

【文学ツーリズム(Literary Tourism)】

文学ツーリズムとは、**作家、文学的創作物やその舞台、或る目的地の持つ文学的遺産への関心により動機付けられるツーリズム活動を言う。**

上の定義が示すように文学ツーリズムは多次元を含む。ツーリスト達は、作家や文学的創作物に係る生誕地や埋葬地、博物館や文学的回遊路、その他の場所の訪問を楽しむ。ワーズワース(*訳注1)のコテージ、トマス・ハーディ(*訳注2)の生誕地、シェイクスピアの墓は全て英国で人気の目的地である。ツーリスト達はまた、コーンウォール州のボドミンムーアにあるジャマイカ・イン(*訳注3)や、エジンバラのガイド付き文学的パブツアー(*訳注4)など、より一般的な形で文学と関係を持つ呼び物も楽しむ。

文学を通じた諸国及びその文化の表現は、その国への訪問を動機付ける。スペインへのバックツアーに参加するツーリスト達は、自分の旅行がヘミングウェイ(*訳注5)やローリー・リー(*訳注6)、ロバート・グレイブス(*訳注7)の作品により動機付けられていると必ずしも考えないかもしれないが、その国に対する彼らの態度や知覚は、恐らく無意識的にそれらのテキストの読書経験により創られたのかもしれない。

文学ツーリズムはもちろん新たな活動ではなく、17世紀から18世紀のヨーロッパのグランドツアーにおける重要な場所の多くは、文学的聖地であった。(Buzard, 1993)初期のグランドツアーのツーリスト達は古代の人々の足跡を辿り、ヴェルギリウスやホラティウス、キケロが描いた風景を訪ねた。後になるとロマン派の詩人バイロンやシェリーが、訪問客が大陸を旅行する際のインスピレーションを与えた。(Towner, 2002)これらのツーリスト達は高い教育を受けたエリートの旅行者であり、このような旅行をするのに必要な文化的意識と経済的資源を持っていた。今日の文学ツーリスト達の中にはこれらの初期の旅行者に似た者達も存在するかもしれない—そして確かに文学的テーマに関心を持つことは教育を受けた中産階級の領分だという想定は今も存在する—、しかし文学ツーリズムは近年、更に広く大衆化されてきている。これは間違いなく、よりアクセス容易な古

典的テキストの映画版の普及や（映画・テレビリズム参照）、「ダビンチ・コード」などツアーという形でツーリズムとタイアップするベストセラー小説や子供向けフィクションの人気向上が原因である。J.K.ローリングによる魔法もののフィクション小説「ハリー・ポッター」は2002年の英国ツーリズム・アワードを獲得した。その理由は、英国の田園地帯の多くをほぼ閉鎖状態に追い込んだ口蹄疫流行の直後の時期に英国のツーリズムを救ったというものである。「ハリー・ポッター」シリーズの人気は、多くの若い文学ツーリストやその家族をツーリズム活動へと促し、この動きは映画版が公開されると更に拡張されたのだった。

文学ツーリストの諸性格に関して一般的仮定をするのは困難だが、彼らは或る作家やその作品への深くまた精通した関心によってか、或いはその場所のもっと一般的な美的・歴史的特質によって、特定の場所を訪れるよう動機付けられているようだ。諸論者達は観光客を文学的「巡礼者」か、或いはより一般的な文化ツーリストと見なしてきた。元来の文学的「グランド・ツーリスト」達は確かに巡礼者で、彼らのお気に入りの詩人や作家を模倣する為に長い道のりを旅したのだが、諸論者達は現代のツーリスト達の中にも同じレベルの献身があることの証拠を見出している。

(Herbert, 1996) しかしながら、関心や好奇心、快適環境により動機づけられた、より一般的な観光客の方が今やはるかに数の上で巡礼者を上回っている。しかしこれら一般的な観光客でさえも、これらの場所と感情的で想像力に富むつながりを持つだろう。というのも、一作家の人生に対する伝記的認識をあまり持たないとしても一彼らは映画やテレビ、その他のメディアを通して確かにその作家に夢中になったという繋がりを持っているからである。

諸論者達は、文学ツーリズムの目的地が3つの大きなカテゴリーに分類されることに同意する傾

向にある。(Fawcett and Cormack, 2001; Herbert, 1996 and 2001; Robinson and Andersen, 2004; Tetley and Bramwell, 2002)

- ・ 事実に関する場所
- ・ 想像上の場所
- ・ 社会的に構築された場所

事実に関する場所とは、作家の人生とリアルな繋がりを持つ場所で、大抵は作家が生まれ、暮らし、作品を産み出し、死んで埋葬された場所である。ハンプシャー州のチョートンにあるジェーン・オースティン(*訳注8)の家や、スコットランドのアロウェーにあるロバート・バーンズ(*訳注9)の生誕地が事例として挙げられる。これらの場所にある観光客の呼び物はわかりやすいもので、有名な小説が書かれた実際の机を見ることや、作家の人生の質素な出発地点を目の当たりにすることなどが直接的に人気である。

文学的目的地の第二のカテゴリーはより想像力に関わり、小説や戯曲、詩の舞台となった場所である。ジェイムズ・ジョイス(*訳注10)の《ユリシーズ》(Ulysses)のダブリン通り、サー・アーサー・コナン・ドイルによるシャーロック・ホームズが住むとされるロンドンのベーカー街221b、或いはキャサリン・クックソン(*訳注11)の文学の登場人物の出身地とされるタインサイドにあるサウスシールズ周辺のエリア、これらは全てツーリストの目的地として人気である。しかし勿論、多くの場所は作家の家であると同時に作品にインスピレーションを与えたものでもあって、その場合、実在の場所がよりロマンチックな想像上の場所を消し去ってしまうので、**真正性(authenticity)**の不明瞭化が生じうる。ブロンテ姉妹(*訳注12)のヨークシャー・ムーアや、ルーシー・モード・モンゴメリ(*訳注13)の有名シリーズ《赤毛のアン》(Anne of Green Gables)の生まれ故郷でありインスピレーションの源でもあるカナダのプリンスエ

ドワード島が、このような場所の 2 つの事例である。両方の事例において、女性作家の実際の生活と家が、彼女たちの文学の有名なヒーローやヒロインの生活や家と混同されてしまう。その結果、観光客が想像上で抱くロマンチックな舞台よりも寧ろ日常的現実と出会うことで、失望が実際に生じることもありうる。(Fawcett and Cormack, 2001; Tetley and Bramwell, 2002)

文学的目的地の第 3 のタイプは、観光客を惹きつける為に熟慮して創造された場所である。ケント州のチャタムに新たにオープンした《ディケンズ・ワールド》(Dickens World) (*訳注 14) は、カンブリア州のウィンダーメアにある《ビアトリクス・ポター・ワールド》(The World of Beatrix Potter) (*訳注 15) と同じく、このタイプの開発である。確かに、有名な文学上の人物や登場人物との繋がりがある地域は、そのテーマに関する様々なタイプのアトラクションを開発することができる。ストラドフォード・アポン・エイボンに、公式施設(ロイヤル・シェイクスピア・カンパニー)から非公式なお土産屋や喫茶室に至るまで、シェイクスピア関連の様々な施設が長期間にわたり作られてきたのもその一例である。多くの文学的回遊路も作られ、観光客は伝記的な場所やより想像力に関わる場所を散策するよう促されてきた。(Macleod et al., 2009) トマス・ハーディ、ジョージ・エリオット、アガサ・クリスティ (*訳注 16)、ロバート・バーンズらの生活を表現する回遊路は一般的に伝記的事実に焦点を当てる。しかしこれに加え、「ダビンチ・コード」(ダン・ブラウンのベストセラー小説がベース)や「ハリー・ポッター」など、文学的創作物そのものを解説する回遊路も存在する。これら 2 つの文学作品の映画版は、このような回遊路の注目度を高め魅力を与える。最後に我々はこのカテゴリーに書物の街、或いは文学的な街を加えることができる。これらの目的地は、例えばジェイムズ・ジョイスとダブリン、ウォルター・スコット (*訳注 17) とエジンバラとい

う風に作家や文学的キャラクターと自らとの繋がりを宣伝する。チェルトナム (*訳注 18) やウイグタウン (*訳注 19)、ヘイ・オン・ワイ (*訳注 20) の事例のように、或る地域が持つ文学的名声への誇りは文学祭の開催という形を取りうる。観光客は、文学的諸活動や専門書店の訪問機会を目当てにこれらの場所にやって来る。

文学ツーリズムの目的地は大抵家屋などの建築物なので、常に大人数の観光客に対応できるわけではない。例えば人気のあるテレビ番組で取り上げられるなどで或る作家への関心が急に高まるような場合、その結果生じる多くの観光客に文学的目的地は対応できないかもしれない。また、極めて多様なニーズを持つ様々な観光客の必要を満たすことに関しても、それを管理するのは大変である。観光客の中には「聖地」の全てのディテールを吸収したい文学的巡礼者もいれば、便利な途中下車地点として立ち寄るだけの者もいるのだから。この点で、文学ツーリズムの目的地はスピリチュアルツーリズム (spiritual tourism) の目的地に似ている。

【関連項目】真正性、映画&TV ツーリズム、特別関心ツーリズム

【読書案内】

Robinson & Anderson (2004)の著作に集められた論文は文学ツーリズムに関する幅広い領域にわたる事例を提供しており、イントロダクションの章は様々な理論的アプローチを明瞭に提示するとともに、文学理論への有益な入門にもなっている。1993 年の Buzard の仕事はヨーロッパにおけるツーリズムの発展に関して文学が果たした役割についての包括的概観を与えるものである。以下のリストにある引用された著作群の分析を通じ読者はこの領域での最近の研究の基礎を学ぶことができるだろう。

【推薦図書】

Buzare, J. (1993) *The Beaten Track: European Tourism, Literature and the Ways to Culture 1800-1918*. New York: Oxford University Press.

Fawcett, C. and Cormack, P. (2001) 'Guarding authenticity at literary tourism sites', *Annals of Tourism Research*, 28(3): 686-704

Robinson, M. and Andersen, H. (eds) (2004) *Literature and Tourism: Essays in the Reading and Writing of Tourism*. London: Thomson International.

(訳注1) ワーズワース (1770-1850) はイギリスを代表するロマン派詩人

(訳注2) トマス・ハーディ (1840-1928) はイギリスの作家。代表作の1つは『日陰者ジュード』

(訳注3) ジャマイカ・インはデュ・モーリアの小説『ジャマイカ・イン』の舞台

(訳注4) コナン・ドイルなど著名作家を輩出したエジンバラはユネスコから文学都市に指定されている。

(訳注5) ヘミングウェイ (1899-1961) はアメリカの作家。スペインを舞台とする作品に『日はまた昇る』や『誰がために鐘は鳴る』がある。

(訳注6) ローリー・リー (1914-1997) は英国の詩人、作家。スペインを舞台とする自伝的作品がある。

(訳注7) ロバート・グレイブス (1895-1985) は英国の詩人、作家。

(訳注8) ジェーン・オースティン (1775-1817) は英国の作家。代表作に『高慢と偏見』など。

(訳注9) ロバート・バーンズ (1759-1796) はスコットランドの国民的詩人。

(訳注10) ジェイムズ・ジョイス (1882-1941) 20世紀最も重要な作家の一人とも評されるアイルランドの小説家。

(訳注11) キャサリン・クックソン (1906-1998) は英国の作家。

(訳注12) ブロンテ姉妹は英国ヴィクトリア朝時代を代表する小説家姉妹。

(訳注13) ルーシー・モード・モンゴメリ (1874-1942) はカナダの小説家。

(訳注14) チャールズ・ディケンズ (1812-1870) は英国ヴィクトリア朝を代表する作家。

(訳注15) ピアトリクス・ポター (1866-1943) は英国

の絵本作家。「ピーターラビット」シリーズで知られる。

(訳注16) アガサ・クリスティ (1890-1976) は英国の推理作家。

(訳注17) ウォルター・スコット (1771-1832) はスコットランドの詩人、歴史小説家。

(訳注18) チェルトナムは英国コッツウォルズ地方の都市。文学祭を毎年開催している。

(訳注19) ウィグタウンはスコットランドの都市。文学祭を毎年開催している。

(訳注20) ヘイ・オン・ワイは英国ウェールズ地方にある古書店街。30軒以上の古書店が立ち並ぶ。

【原】

〔モビリティ (Mobility)〕

モビリティという用語は我々の移動能力を指す。それはしばしば交通と関連づけて使用されるので、重要なツーリズムの概念である。モビリティはまた、情報の流れや海外投資、社会階層をも指す語で、この点でも旅行やツーリズムに関連している。

モビリティ即ち移動することのできる能力は、常にツーリズムの中心概念であった。そしてその結果、マストーリズムはモビリティと交通の発展に結び付けられてきた。初期のグランドツアーの時代以降、常にエリートは旅をすることができたが、大衆にモビリティとツーリズムをもたらしたのは列車と安価なチャーターフライトの導入であった。トーマス・クックや馬車旅行の時代以来、それらが部分的に列車や船やそして飛行機（或いは自家用車）により取って代わられてきたとしても、利用可能な交通手段がいかんにして、そしてどこに我々が旅行するかを規定してきた。Urry(1995)は、移動可能であることが近代世界の一部であり、旅行する能力が人々の世界の見方を変化させたと言った。旅行者が歩くか馬に乗るしかなかった

た時代には、通り過ぎる土地に対する彼らの知識は深く親密なものだったであろう。鉄道がスピードをもたらした時、それは列車の車窓から見える風景を「平坦化」し、全ての注意が旅の目的地へと向けられる標準化された移動ルートを創り出した。よってモビリティは「いかに人々が近代世界を経験するかを変容させることに対し責任があり、人々の主観性と社会性の形式や、自然・風景・街並み・他の社会に対する彼らの美的評価を変化させるものである。」(Urry, 1995: 144)

交通研究、社会学、人文地理学、余暇研究、移民研究といった領域は常にモビリティという領域の研究に従事してきたが、Hall(2005)はツーリズム研究が最近までこれらの考えを持つに至らなかったと言う。これはツーリズムの定義に内在する問題に由来するかもしれない。というのも、例えば多くの余暇研究が家の内部や近辺でなされる諸活動に注目するのに対し、ツーリズムは局地的活動を見ずに国際旅行の視点から研究される傾向にあるからだ。しかし、他の多くのタイプのモビリティがいまやツーリズム研究者により精査され始めている。事例は以下である。

短期・長期の教育目的の旅行、ビジネス旅行、ヘルス・ツーリズム、余暇のショッピング、セカンドホーム・トラベル、日帰り旅行、仕事と旅行との組み合わせ、アメニティを求めての移住。
(Hall, 2005: 23)

これらのより新たなモビリティ形式は、個人が家を一定期間(大抵1~2週間)離れ、目的地に留まり、帰宅するというツーリズムの定番のパターンに挑戦する。「グローバル・ノマド」(Richards and Wilson, 2004)という考え方は、グローバル化した世界におけるモビリティの新形式を導入するものである。(バックパッカー旅行 [backpacking] を参照) これらの旅行者達は地球を股にかけた幾分目的に欠ける旅行により現代社会の根無し草的

性格を表現しており、彼らの旅行は長距離旅行にかかるコストと時間の縮減により容易なものとなったものだ。こうして「グローバル・ノマドは明らかに簡単に差異と差異化とを求めて物理的・文化的障壁を超えて行く。そしてこのようにして・・・ノマドは近代的ツーリズム産業の鉄の檻に閉じ込められた<ツーリスト>とは正反対の場所に位置づけられるのだ。」(Richards and Wilson, 2004: 5) こうしてグローバリゼーションはノマドの旅行を簡便化するのだが、そこで人を惹きつけるものとは地域文化や差異との相互交流機会である。Bauman(1998)が言うように結果としての「グローカリゼーション」は、幾らかの者達の自由なモビリティと、その他の者達の場所に拘束された存在を基礎とする、社会の再階層化として考えられるのが最適である。例えばツーリストの流れは主に単一方向的である(例: 西洋から東洋へ、先進国から途上国へ)。先進国の人間達は地球上をスムーズに旅行することを彼らの権利だと感じるかもしれないが、これは決して普遍的権利ではない。ツーリズム市場が生まれる地域はいまだヨーロッパ、アメリカ、アジア、太平洋地域に集中している。

バーチャル・リアリティとコミュニケーション技術の時代に、モビリティは勿論単なる交通手段以上のことを意味する。モビリティは(しばしば若干軽蔑的な意味を込めて「フラックス」[Flux]、肯定的な意味を込めて「フロー」[Flow]と言われるが)、情報の移動、状況や同一性の変化、社会における個人の昇進(「上方へのモビリティ」)、仕事を求めての或る国から別の国への労働者の自発的かつ円滑な移動、移民といった事柄と結び付けられるのに加え、ツーリズムにとって同程度に重要な海外投資の可動性と結び付けられる。

伝統的にツーリズムにおいて、旅行産業に関してどの場所の何が開発されるかを支配していたのは、その場所へのアクセスを排他的にコントロールしていた航空会社組合やツアー・オペレーター

や旅行代理店だった。モビリティが高まりインターネットと IT により入手可能な情報が増えた結果、旅行情報へのアクセスは多国籍企業の制限的拘束具から解放され、LCC やかつては「公式」地図に載っていなかったリゾート地へのアクセスを生み出した。(e - ツーリズム [e-tourism] 参照) 情報のこの更なる流れやモビリティは、予約した施設への実際の訪問前のバーチャル旅行の可能性ももたらし、ツーリズム市場における消費者側からのコントロールをより大きなものとした。加えて目的地における消費支出や経済的利益配分が増加し、リーケージが減少した。消費者のこの拡張された自由はサービス産業の更なるモビリティを生み出し、ツーリズムにおける需要主導型のシナリオの結果として、小・中規模企業のフレキシビリティが向上した。これは供給主導のツーリズム産業とは対立するものである。

将来におけるモビリティを変化させる要因となるのは技術のみではない。気候変動と旱魃の激化、加えて穀物の不作は、貧困からの逃走を目指す不法移民という形を取って前代未聞の規模でモビリティを生み出している。多くの移民運動はアフリカやラテンアメリカからヨーロッパへと向かう。ヨーロッパで働く家族からの送金がラテンアメリカやアフリカに住む多くの家族の主要収入源となっている。このモビリティはヨーロッパ人口の高齢化によっても促進されている。ヨーロッパでは居住地域で手に入りにくい、手頃な価格の専門的医療サービスやケアが必要とされているのだ。不法移民の動きは非熟練低賃金労働に依拠するツーリスト産業に利益をもたらす。これは特に「全て込みの」パッケージツアーが販売される地域に妥当し、そこでは多くの人的資源に対し少額の支出しか必要とならない。労働コストの低さはインドや中国といった地域への外国資本の投資の動きも強化し、そのような地域では社会の特定部門に大なる富がもたらされると同時に、その結果としてより高いレベルの中間階級のライフスタイルの

一部だとみなされる海外旅行への需要も産み出される。

交通が機械化された当初より、技術は時間と空間の無化をもたらしてきた。(Aitchison et al., 2000) 目的地はますます近いものとして出現し、自分がどこへ旅行可能かということへの期待も拡張されてきた。かつてロンドンからニューヨークへの旅行は長距離フライトだと考えられていたが、今やそれは週末の手頃な旅行だと見なされている。我々のコミュニケーション技術の速度はまた、社会的経済的取引が同時的に生じるグローバル・ビレッジに住んでいるのだという我々の感覚にも寄与するものである。

時間や空間に対する我々のこれらの変化によって、例えばヴァージン社が提案する成層圏への娯楽ツアーの為の宇宙船ヴァージン・ギャラクティックなど、革新的なモビリティの提案が可能となった。逆に幾つかのツーリズム市場においては、より遅い速度での旅行を提供する娯楽定期船やクラシックな列車での旅行などへのノスタルジーも盛り上がってきている。ここではゆっくりとしたモビリティが旅行者にゆっくりと流れる風景を観察する時間を可能とし、このタイプの質の時間が贅沢なものとされる。

この状況においては、まさに旅行という行動が休日そのものとなる。

勿論、モビリティは「縮小した」モビリティという観点からも検討されることができ、これが現代のツーリズム産業の主要問題でもある。交通インフラ、宿泊施設、目的地であるリゾート、観光客へのアトラクションやガイドのデザインは全てモビリティを損なわれた人々へのアクセス可能性を含む必要がある。そしてこれは特に歴史的自然的環境においては主な挑戦となりうるものである。

【関連項目】 バックパッカー旅行、e - ツーリズム、ツーリズム地理学

【読書案内】

読者は Hall の著作 *Tourism: Rethinking the Social Science of Mobility* により思考を喚起されるだろう。Sheller and Urry による著作 *Tourism Mobilities: Places to Play, Places in Play* もまた興味深い。然しながら最も有益な情報源は Taylor & Francis が刊行する雑誌 *Mobilities* である。

【推薦図書】

Hall, C. M. (2005) *Tourism: Rethinking the Social Science of Mobility*. Harlow: Pearson.

Sheller, M. and Urry, J. (2004) *Tourism Mobilities: Places to Play, Places in Play*. London: Routledge.

Urry, J. (1995) *Consuming Places*. London: Routledge. (ジョン・アーリ (吉原直樹、大澤善信監訳) 『場所を消費する』法政大学出版局、2003年)

【原】

【新植民地主義 (Neo-colonialism)】

新植民地主義は植民地主義的帝国がもはや存在しない時代における、資本主義的諸力の作用を記述する為の用語である。力を用いる代わりに、新植民地主義的権力はより力の弱い諸国家に対し経済的・財政的・商業的政策を使用する。第三世界でのツーリズムは多くの者により新植民地主義の形式だと考えられている。

かつての植民地主義は、帝国を拡張し力と支配を増大させる為に更に広い領土を支配する必要性と結び付いていた。そのような形での最後の大帝国だったヴィクトリア女王統治下の大英帝国は、連邦という形での「植民地主義」(colonialism)を産み出した。植民地主義の最後の要塞の一つだった香港はつい最近「ローカルな」法の下へと返還されたが、カナダやオーストラリア、ニュージーランドやアフリカの一部はいまだに連邦という形での植民地主義の紐帯を創り出している。植民地主義が含意していたのは領土からの分離と、外国

から行使される制度的構造の制御であった。これはしばしば地域の代表団や代議員を通して行われた。大抵の場合、支配は東洋や南方を侵略する西洋や北方からのものとして行使された。最も残酷な場合には、過去の植民地主義は外国人の主人が地域住民を奴隷化する形を取った。

植民地主義、脱植民地化、そして外国に押し付けられた規則からの解放がもたらした遺産は、多くの国家にとって一わけてもアフリカで一政府の腐敗と対外債務の拡大だった。世界銀行やIMFなどの国際機関、資本主義諸権力(かつての宗主国や諸企業)、特にアメリカ合衆国は他の諸国家の支配の為に新植民地主義を用いている。彼らは、かつて自らが物理的に支配したより力の弱い諸国家を支配する為に、経済的・財政的・商業的政策を用いる。構造調整プラン(SAPs)は大抵の場合、負債帳消しの為に提案されるが、結果として貧困増加、公的支出の劇的削減、資源採掘と輸出品生産の強化を産み出す。そしてSAPsは新植民地主義の新形態を促進する。それはつまり外国からの投資拡大であり、第三世界諸国家を安価な労働力と原材料との貯蔵地として利用することだ。その結果生じるのは経済的リーケージや国外からの良く訓練された中間管理職の輸入に伴う現地スタッフの「降格」(demotion)で、それによりこれらの国家の自己充足的経済への発展は妨害される。こうして新植民地主義の円環は閉じられ、第三世界諸国家はより豊かな国家からの援助に依存することとなり、それ故、生き延びる為に自らの政策に関して海外からの命令を受けねばならないこととなる。

新たな生存戦略の一つとしてアフリカやカリブ諸国で地域レベルでも国家レベルでも採用されたものは、ツーリズムの促進だった。しかしながら、成長戦略として提案されたにも拘らずツーリスト向けの多くのリゾートは外国資本家と国外企業により制御されている。リーケージとして言及された現象は、ツーリスト達の母国で購入される包括

的パッケージツアーの促進と組み合わせられ、自然・社会環境やバランスについて、その強化というよりも寧ろ劣化をもたらさう。

ツーリズムが新植民地主義や帝国主義の新形態であるか否かについての論争は、1970年代以来顕著に展開されてきた。(例：Nash, 1977; Turner and Ash, 1975) ツーリズムが現在、そして予見可能な未来において西洋の先進国により支配され、受け入れ側諸国を従属的なものとし先進国の要求に従うものにするだろうという懸念は妥当なものである。ツーリズムの流れはいまだに主として先進国から発展途上国へと向かっている。地域住民が自らを直接取り巻く環境の外へ旅行する機会は殆ど無く、故に彼らの役割はツーリスト達に奉仕するという以上のものではありえない。彼らは決して「ゲスト」(guests)であるとはどのようなことかを経験することが無く、それ故に彼らは従属的で、豊かな西洋人の召使いと変わらない程度の地位に追いやられていると感じるかもしれない。

帝国主義の新形式としてのツーリズムについての議論に関する多くの理論は、その起源を経済発展理論に持つ。伝統的に経済学者達は中心一周縁理論と、受け入れ側国家と西洋という「恩人」(benefactors)との間の成長—従属関係とに注目してきた。従属性は、それにより発展途上国の現地経済が外来性の市場の必要性に奉仕するように再び仕向けられるようになるプロセスだと見なされる。(Hall, 1994) 中心一周縁関係という考え方は、この従属理論内部において、不平等でしばしば搾取的なこの関係に光を当てるものとして用いられる。Nash(1989)は、帝国主義とは社会的な利益への関心の海外への拡張だと言った。大都市的中心或いはコア(大抵はかつての帝国主義国家)はその力を世界における周縁的国家や地域へと行使する。Mathieson and Wall(1992)は、3つの経済的条件が、ツーリズムを新帝国主義或いは新植民地主義の形態だとする主張を証明すると言う。それらは以下である。

1. 発展途上国が安定した収入手段としてのツーリズムに依存し始めること
2. 支出と利益の大部分が海外投資家に還流し、高いレベルの漏出が生じること
3. 専門的・管理職的地位で雇用されている現地住民がいないこと

この議論は、ツーリズムが新植民地主義の形態として再び堅固なものとなっているように見えるカリブ諸国などの旧植民地については特に適切である。Burns(1999: 157)は従属理論の理論家として、発展と未発展とがいかに同じコインの両面であるかを記述している。最初は重商主義を通して、後に植民地主義を通して産み出された搾取される側からの剰余金は、大都市的国家を発展させると同時に周縁国家を未開発なままに留めるという二重の結果をもたらした。

Craik(1994)は、旧植民地諸国の人口がツーリストによって増加し、植民地時代の後の「残骸」(detritus)がツーリストの見物場所へと変容させられた点を指摘している。例えば Hall and Tucker(2004)は、植民地時代を経た多くの島々が「楽園」(paradise)として描かれ、それが単に「他者」(other)という西洋人の持つロマン主義的観念を強化するに過ぎない点や、エロティックな含意を持たされたイメージが現地の「異国的」(exotic)な人々に対し用いられうる点を提示する。Hall and Tucker(2004)に寄稿している著者の大部分は、特に多くのヨーロッパ人が帝国主義に郷愁を感じそれを理想化しうるかもしれないという事実を理由に、現代のツーリズムにおいていかに植民地主義的思考や言説が現存し続けているかを示している。結果として、彼らは植民地的風景や建築物や人々に関する自分自身の神話と幻想とにより魅惑されているのである。

特に第三世界の諸国家は、第一世界の工業化された風景の現実と極めて異なるので、より原始的

で文化的に異国的だと見なされる。閉じられたリゾート地における、(表面上は安全確保を理由とする) 包括的パッケージツアーという形での「オルタナティブ・ツーリズム」(alternative tourism)の商品化によって、実際には「バーチャル」(virtual)であるにも拘らず、目的地においてツーリストはより受け入れやすい外国的現実を自分のものとすることができ、また、自分自身を国家経済の恩人だとみなすことができる。帝国主義的搾取と従属の関係性を確かに存続させているツーリズムの一形態は、セックス・ツーリズム(sex tourism)である。国際的ツーリズム市場は引き続き北側、西側からの消費者により支配されている。組織化されたツーリストにとって、ツーリスト向けのリゾート地やサービス産業にいる「他者」とは、多くの意味で植民地時代の現地住民に等しい。文字通りの意味で世界の「他の」(other)側では(西洋/東洋、北側/南側)、全てが可能となり全てのタブーが侵犯される。かつてないほどのセックス・ツーリズムの増加の主な理由には、更なる貧困化と家父長的で性差別的社会の存続が挙げられる。セックス・ツーリズムは確かに新植民地主義的な「他者化」(othering)と同じプロセスの一部を構成しており、それにより地域住民はツーリストのまなざしの異国的/性的対象として描かれる(そして売られる)。その地域の先住民女性や男性はしばしば、豊かで力を持つ西洋からのツーリストの要求に対し従属的なものとされる。貧困に傷ついた村民達は時に、彼ら家族の将来の生存を確実化する手段として、若い子供たちをセックス・ツーリズム産業に売るように説得される。

新植民地主義的ツーリズムは明らかに政治的経済的に不平等で搾取的な関係性に基礎を持つが、そこには更に考慮される必要のある多くの社会的文化的問題も存在する。これらの多くは植民地時代の遺産の(再)評価に関係している。植民地時代の遺産は地域住民にとって不調和で無意味なものでありうる。例えば Hall and Tucker(2004)の中

で Fisher(2004)は、フィジー諸島のレブカの事例を挙げる。^(*訳注1)そこでは多くの地域住民達が、古い植民地時代の建築物は取り壊され機能的建物により代替されるべきだと信じている。それらがフィジーの歴史を代表すると考える者は極めて少ない。彼らはまた、建築物が建てられた場所はその建築物が存続しているか否かに拘らず、何らかの形でその「精神」(spirit)を保持すると信じている。これは建築物を是が非でも保存しようとするヨーロッパの保存主義者と際立った対照を為す考え方である。アフリカの現地住民達は普通、触れることのできる遺産(例:建築物)にはあまり関心を持たず、不可視の伝統の方に重きを置く。これが意味するのは、現地社会の持つ価値観とツーリズムの開発業者達の社会の持つ価値観とがしばしば根本的に異なるということであり、それが新植民地国家におけるホストゲスト関係を更に管理困難なものとしている。

【読書案内】

ツーリズムと新-或いはポスト-植民地主義という主題に関する最良にして最新の書籍の1つは Hall and Tucker による *Tourism and Postcolonialism* である。帝国主義の一形態としてのツーリズムに焦点を当てた初期の画期的作品には Nash(1977,1989)の著作や Craik の「周縁の快樂」に関する論文がある。

【推薦図書】

Craik, J. (1994) 'Peripheral pleasure: the peculiarities of post-colonial tourism', *Culture and Policy*, 6(1): 153-82

Hall, C. M. and Tucker, H. (eds) (2004) *Tourism and Postcolonialism*. London: Routledge.

Nash, D. (1977) 'Tourism as a form of imperialism' in V. Smith (ed.), *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. Oxford: Blackwell.pp.33-47.

(訳注1) レブカはオバラウ島にある小さな街。1874年から1882年間首都が置かれ、ヨーロッパ人により多くの西洋建築が建てられた。

【原】

〔ポスト・ツーリズム(Post-tourism)〕

ポスト・ツーリスト或いはポストモダン・ツーリストとは、ツーリズム産業が益々提供しつつある非真正的で商業化されたシミュレーションとしての経験に対し、若干のアイロニーを伴いつつも公然と応じる消費者である。

ポスト・ツーリストという概念は、ポストモダン時代の消費者の態度や嗜好に応じて展開されてきた概念である。この用語は Feifer(1985)により造られたと考えられ、その後 Urry(1990/2002) や Rojek(1997)その他の者により使用されてきた。ポストモダン世界はグローバリゼーション、超消費主義、経験経済(experience economy)、そして技術の新開発により特徴づけられる。消費者は多くの選択肢と可能性を持ち、これら一連の機会から利益を得る為にしばしば同時に一見両立不可能な活動に取り掛かる。故に、ポストモダン・ツーリズムは「模倣・ツーリズム」(pastiche tourism) (Hollinshead,1997:192)、或いは「コラージュ・ツーリズム」(collage tourism) (Rojek,1997:62)とされてきた。

Tyrell and Mai(2001)の報告によると、現代的消費者にとって今や経験と記憶の方が製品よりも大きな意味を持つ。そして彼らが強調するのは発展に関する革新的アプローチの必要性であり、それは「金銭的に裕福/時間的に貧乏」(money rich/time poor)な消費者の個々別々のニーズを満足させるものである。彼らの報告が依拠する Pine and Gilmore(1999)の仕事は経験経済に関する議論で、ビジネスとは消費者に対しユニークで記憶に残るものを創造する為に競争するものとされる。ポスト・ツーリストは経験の創造に対し敏感な傾向があり、しばしばその経験が幻想的であればあるほど良い。彼らは新技術に精通しており、特に

メディアに対し敏感である。ポストモダン・ツーリストの特徴については Urry(1990/2002) と Walsh(1992)により議論されている。彼らはいかに多くのポストモダンの消費者が旅行知識をメディア表現経由で獲得しているかを記述する。ツーリストのまなざし(tourist gaze)の典型的対象を見る為に家を出る必要すらない者としてポスト・ツーリストを描き出す Feifer(1985)を彼らは引用する。シミュレーションとしてのツーリスト経験は、テレビの旅行番組やインターネットサイトやソフトウェアプログラムを通して彼らのリビングルームへともたらされる。

ポスト・ツーリストは、例えば文化ツーリストのようなより慣習的で伝統的なツーリストとは極めて異なる見解や期待を持つ。ポスト・ツーリストにとってツーリズムは遊びに満ちたものとなった。「ポスト・ツーリストは彼らがツーリストであることと、ツーリズムが一つのゲーム、或いは多様なテキストを持つ一連のゲームであって単一の真正的なツーリスト経験など存在しないことを知っている」(Urry,1990/2002:100)。ポスト・ツーリストは歴史と文化の多様な解釈を受け入れ、「高級」(high)文化と「低級」(low)文化とを差異化する必要性を感じない。彼らは伝統的・民族的文化と同じ程度に現代的・大衆的文化(例:ポップミュージック、テーマパーク)を受け入れる。彼らはまた常に現実とフィクションとを区別するわけではない。これは主にシミュレーションとしての経験、バーチャル・リアリティ、ファンタジーの経験の創造に拠るところのものだ。ポスト・ツーリストは文化がしばしば考案された非真正的なものであることを認識しており、心から非真正的経験を受け入れる。そして「ハイパーリアル」(hyper-real)なアトラクション(例:テーマパーク、レジャーセンター、ショッピングモール)や、シミュラクル(例:サンタ・クロースのラップランド)、或いは AlSayyad(2001)により記述されたように、ラスベガスや「偽の真正性」(fake

authenticity)を持つ遺産に関する捏造遺産テーマパークなど、「真正的な偽物」(authentic fakery)である場所に惹き付けられる。Kirschenblatt-Gimblett(1998:9)は、ポストモダン世界は自分自身の一種の博物館になったと言う。「ツーリスト達はバーチャルな場所を経験する為に実在する目的地へと旅行する。」

Rojek(1993)は、ポスト・ツーリストが持つ3つの主要な特徴を挙げている。

- ・ ツーリスト経験の商品化への自覚。ポスト・ツーリストはそれを楽しみながら取り扱う。
- ・ 旅行を通じた自己改善よりも、目的そのものとしての経験に惹き付けられること。
- ・ 目的地そのものと同程度に、ツーリズム目的地の表象も重要であることの受容。

これは、ポスト・ツーリストがツーリズムにより提供される現実逃避とエンターテイメント的経験の多様性とを自由に楽しみうることを意味する。彼或いは彼女は、場所そのものと同じ程度に、記念碑のレプリカや場所の視覚的表現から快楽を獲得しうる。

Rojek(1993)は、ポストモダニズムの風景で大きな役割を果たし、ポスト・ツーリスト達により訪れられる4種のツーリズム目的地を示している。

- ・ 危険地域(墓、戦争地帯、大虐殺、暗殺や事故の現場など、残虐行為の生じた場所の商業的開発)
- ・ 遺産のある場所(これらは過去の解釈として必ずしも常に真正的ではなく、殺菌され、美化され、エンターテイメント化された歴史の1つのバージョンを提供する。)
- ・ 文学的風景(例:しばしば虚構の中においてではあるが、作家の作品で重要な役割を果たすことで有名になった場所)
- ・ テーマパーク(これらはグローバル文化、新技

術、メディアの全側面を結びつける。)

Smith(2005)はポスト・ツーリストの一つの形式に言及するが、それは「新たなレジャー・ツーリスト」(new leisure tourist)である。これはツーリストの中でも相対的に新たな種族であって、現実逃避、エンターテイメント、そして楽しみを探求する。可処分所得レベルは相対的に高いが、持ち時間は一般的に少ない。快適さと安全性が求められるにも拘らず、ツーリズム経験は興奮とスリルを与える必要もある。これはホテルやリゾート地、テーマのあるアトラクションの安全領域の中にありうるものだ。典型的アトラクションは、アドベンチャーランド、サイバーワールド、シミュレーションされた環境の観光であろう。新たなレジャー・ツーリストはBarber(1995)による「マック・ワールド」(McWorld)概念に合致する風景を楽しむ。マック・ワールドでは多くの馴染み深いグローバル・ブランド企業が一つの屋根の下に集められている。このようなアトラクションがどこに在るかは重要ではなく、重要なのはそこで得られる経験である。新たなレジャー・ツーリストは文化ツーリスト等の伝統的観光客とは極めて異なる。彼らには地域社会やその文化に関心があるという素振りも見られず、シミュレーションとしての環境がより好まれる。例えば遠方への旅行に伴う不便を経験せずとも、多くのテーマパークがエジプトの「王の谷」やアラブ世界のスーク、アフリカのジャングルといった環境のシミュレーションを持っており、そこでは「より安全な」(safer)経験が提供される。

様々なタイプのツーリスト達が持つプロフィールや動機には明らかにかなりの差異が存在する。例えば文化ツーリスト達は活発に真正な文化経験や地域住民との相互交流を探求するが、ポスト・ツーリストはよりシミュレーション化された経験を楽しむ。彼らは本当に真正的な場所や文化を見つけたことは不可能だと信じているのだ。新たな

レジャー・ツーリストはと言うと、彼らは活発に偽の真正性とシミュレーション化された世界とを探している。彼らは単純に楽しみたい、また楽しまされたいのである。それに対し文化ツーリスト達は恐らく教育的、自己改善的探求の途上にある。ポスト・ツーリストや新たなレジャー・ツーリストは積極的な遊び心を持ちつつアプローチし、簡単にファンタジーと現実とを区別しないかもしれない。彼らは商業化に気がついていないのかもしれないが、それに気づいたとしても、それで気分が損なわれるということはないだろう。

ポスト・ツーリストという概念が近代という時代にとってどれほど典型的なものか、そしてそれがどの程度ライフスタイルやライフステージにより駆り立てられるに過ぎないものかについては議論する余地がある。ツーリストのプロフィールは決して固定的で静的なものではなく、人々はある時には文化ツーリストであり、別の時にはポスト・ツーリスト或いは新たなレジャー・ツーリストであることを選ぶかもしれない。例えば独身者や子供のいないカップルは、ポスト・ツーリスト向けのアトラクションをしばしば求める小さな子供のいる家族や10代の若者よりも、文化的諸活動を追求する傾向にあるかもしれない。或る特定の時期には、人は教育よりも現実逃避やエンターテイメント、そして楽しみを求める方を選ぶことがありうる（例：生活や仕事が特にストレスに満ちたものである時）。こうしてポスト・ツーリズムはライフステージや雰囲気によっても喚起されるのであり、類型論が示しうるのは各個人の選好や気質というよりも、集団的傾向にすぎない。それ故、ポスト・ツーリストのプロフィールは試みに下の囲み部分に挙げられるものとなる。

ポスト・ツーリストの典型的プロフィール

- ・ 相対的に若年（18歳～45歳）
- ・ 高い可処分所得
- ・ 消費に対する脅迫観念を持つ

- ・ 時間に追われている
- ・ 個人主義／独立主義
- ・ 休日は現実逃避を求めるが、家では仕事に取りつかれている
- ・ 教育や自己啓発よりもエンターテイメントの方に関心を持つ
- ・ 経験を収集する
- ・ 贅沢、安楽、安心を享受する
- ・ あくまでも制御された環境の中でスリルを求める
- ・ 移り気
- ・ 新技術やメディアに関心を持つ
- ・ セレブリティ崇拜

ポスト・ツーリズムが、時間の足りない中、貴重なレジャー経験を最大化する為に可能な限り多くの活動に参加しようと熱望する消費者により支配されていることは明らかである。高い可処分所得は彼らにますます長い休暇を取ることや、趣味に関して敏感で要求の高い者となることを可能とする。結果として、快適さ、贅沢さ、サービスの質への欲望が最も重要となるが、現実逃避、エンターテイメント、楽しみへの欲望も同様に重要である。ポスト消費者は明らかに家を離れ仕事が課してくる要求を背後に捨て去りたいのだが、彼らを惹きつける為には目的地がますます洗練され刺激に満ちたものとなるよう求められている。故に、競争の激しい市場の中での目的地の差異化とブランド化の手段として奇妙なツーリズム企画が開発されている。ポスト・ツーリストにより訪問される典型的アトラクションを以下の囲み部分に示す。

ポスト・ツーリストの典型的目的地

- ・ ロスアンジェルスのようなポストモダンな大都市
- ・ ラスベガスやドバイのような幻想に満ちた目的地
- ・ テーマパーク

- ・ 幻想的アトラクション (サンタクロースランド)
- ・ 映画やテレビのスタジオ、セット
- ・ 「マック・ワールド」、或いはグローバルなエンターテインメントゾーン (巨大ショッピングモール)

未来のポスト・ツーリストはより年齢を重ね、更に時間と金を持つことになるだろう。全ての者がより技術に対するリテラシーを高めメディア指向になった時に、アトラクション側がどのような反応をするのかを見るのは興味深いこととなるだろう。環境に優しくなく奴隷労働も使用しているとして批判されてきたドバイのような目的地の持続可能性に関しては多くの議論が重ねられてきたが、人工的でシミュレーション化されたバーチャルな環境は、マスツーリズムの影響を最も受けにくい。故に恐らくは皮肉なことだが、ポスト・ツーリズムの非現実的で非真正的な目的地は将来におけるツーリズム開発の最も持続可能な形式を提供するだろう！

【参照項目】 経験経済、ツーリストのまなざし

【読書案内】

ポスト・ツーリスト概念を専門的に扱った書物は存在しないが、何人かの作家の作品の中でこの現象に対しての言及がなされている。Feifer の *Going places: The ways of the Tourist from imperial Rome to the Present Day*、Urry の *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*、Rojek の *Ways of Escape: Modern Transformations in Leisure and Travel* である。

【推薦図書】

- Feifer, M. (1985) *Going places: The ways of the Tourist from imperial Rome to the Present Day*. London: Macmillan
- Rojek, C. (1993) *Ways of Escape: Modern Transformations in Leisure and Travel*. London: Macmillan.

Urry, J. (1990) *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London: Sage. (ジョン・アーリ (加太宏邦訳) 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995年)

【原】

【宗教的・精神的ツーリズム (Religious and Spiritual Tourism)】

宗教的ツーリズムは、宗教的な場所や建造物、目的地を訪問することに主眼を置いたもので、主要な目的は、特定の信仰と関わって、それを強化することにある。

精神的ツーリズムは、自己を超えたところにあり、体-心-精神のバランスに寄与する生命の諸要素を探索することを目的とする。その諸要素は、宗教と関係することもあれば、そうでないこともある。

宗教的ツーリズムは、定義づけるのが容易ではなく、「宗教的」ツーリズム、「信仰」ツーリズム、「精神的」ツーリズム、「巡礼」ツーリズムといった用語は、交換可能なものとして用いられる。ほとんどの宗教的な場所、建造物、目的地は、その宗教を信仰していない人を含め、文化的遺産ツーリストにとっても魅力的なものである。宗教的な場所への訪問において、複数の動機をもったツーリストもいるだろう。すなわち、宗教的信仰、建築への興味、歴史的価値への関心を同時にもったツーリストもありうるだろう。多くの統計調査は、宗教的ツーリズムと、宗教遺産ツーリズムを一つのものとして数えており、それぞれどれだけの量があるのかについて問題を抱えている。理論的には、宗教的ツーリズムは特定の宗教的集団に属し、特定の信仰についての知識や関わりを促進することを主要な目的として旅行する訪問者のみに当てはまるものである。

宗教的ツーリストの典型的な人物像を提供する

こともまた、難しいことである。その年代、ジェンダー、ナショナリティーは、実際上、ばらばらだからである。信仰の本性によって、どれくらいの割合の人が宗教的ツーリズムを行っているのかを確定することができるかもしれない(たとえば、全てのイスラーム教徒が人生において最低一度はメッカ巡礼をするものと考えられる)。他の国々に比べて、より宗教的であると叙述される国々もあるし(たとえば、アイルランド、イタリア、ポーランド、ポルトガルのようなカトリックの国々)、逆に、信仰をもたない者の割合が高い国々、たとえばスカンジナビア半島はじめ北ヨーロッパの国々もあるだろう。けれど、これらの国々も、非宗教的な精神的ツーリストを生み出しているかもしれない。

宗教的ツーリズムのアトラクションに関しては、Nolan and Nolan (1989) によって、最も有名な分類の一つが提示されている。彼らは、次のような三つに分ける。

- ・ 巡礼の聖地、すなわち、宗教に動機づけられた、近隣以外の場所からの旅の目的地として供される場所。
- ・ 宗教的ツーリズムのアトラクション、すなわち、宗教的意味をもった構造物ないし場所で、歴史的・芸術的な重要性をもそなえているもの。
- ・ 宗教団体と結びついた祭。

この研究は、特別の価値をもった宗教上の建造物についても言及しており、それが建築学的な意味をもつのみならず、特別の歴史的関心の寄せられる場所であるとか、牧歌的な風景の中に位置するものであるという理由で、巡礼者とツーリストを同等に集めると述べている(たとえば、フランスのシャルトル大聖堂やモン・サン・ミシェル大修道院)。また、宗教に駆り立てられて建造されたものの、宗教的目的では使用されていない建造物や記念碑についても言及されている。誓いの成就

のために、あるいは起きた奇蹟への感謝のために建てられた建造物や記念碑もある(たとえば、リオデジャネイロのキリスト像)。宗教団体と結びついた祭は、その独自色と作法によって、多くの信仰者および非信仰者を集めている(たとえば、受難週)。最も多くの巡礼者および、宗教的遺産に関心をもつツーリストを集める場所は、聖書やコーランほか、聖典に登場する場所であるという傾向がある。

宗教的ツーリズムには、他の種類のツーリズムと大きく異なる要素がある。同じ信仰、宗派の集団で、精通したガイドをともなって旅行することが多く、専門のサプライヤー、わけでも、ダイレクト・メールや教会・寺院・シナゴグの部署を通じて購入するという要素である。また、他の旅行に比べて季節が問題にならない傾向にあるが、場所によっては、宗教暦における重要な日付が、強い意味をもつという要素もある。この分野において、セミナーや会議に関する市場が拡大しつつある(たとえば、アッシジはカトリックの会議におけるすき間市場を獲得している(*訳注1))。Moore (2007) は、宗教的旅行者に関し、「貧者のメンタリティー」(“poverty mentality”) から、最高級の施設を期待する傾向へのシフトが見られることを示している。これは、全ての宗教的ツーリストにあてはまることではないかもしれないが(たとえば、巡礼者)、設備の質は確かに、向上しているように思われる。

宗教的ツーリズムのうち、ある種の形態、たとえば巡礼ツーリズムは、さらなる特質をもっている。この種の宗教的ツーリズムは、中世のあいだに一般的なものとなった、聖地への旅という特徴をもったものである。その時代の一般的な目的地としては、サンティアゴ・デ・コンポステーラ、チェストホヴァ、そしてローマだった。巡礼は身体的な旅であり、しばしば、個人の人生を象徴し、それを反映するものである(Devereux and Carnegie, 2006)。巡礼という市場は、特定の宗教

のツーリストを引きつけるものであるが（たとえば、イスラーム教徒はメッカに）、より「精神的な（'spiritual'）市場をも引き寄せつつある（たとえば、サンティアゴ・デ・コンポステーラ）。

巡礼は、ヴィクター・ターナーの文化人類学研究『キリスト教文化におけるイメージと巡礼』のテーマであり、彼はそこで、巡礼とは、世俗的な生活の範囲を超えて、境界状態（liminal state）（*訳注2）に入ることを通じた宗教的実践であると論じている。そのとき、巡礼者は、一時的に通常の社会的制約が停止することで、他の巡礼者との間に「コミニタス」（'communitas'）（*訳注3）の感情をも経験するだろう。Eade and Sallow（1991）と Morinis（1992）が巡礼についての編著を出しており、両者ともターナーの仕事について、敬意と批判を込めて出発点であったとしている。彼らは、巡礼者が、辺境や周縁を求めるツーリストとは違い文化と社会の中心を求めるものだと述べている。Hannaford（2001）は、三つの主要な領域において構築された巡礼をはかる尺度の枠組についての議論を展開している。すなわち、（a）物質的、身体的側面、（b）個人的、体験的次元、（c）観念的な側面の三つであり、それらは、ツーリストの《気晴らし》（recreation）と、巡礼者の《再=創造》（re-creation）の差異が強調されるとして

いる。
巡礼者の主要な動機は、次のようなものである。

- 宗教上の戒律を実行するため
- 奇蹟や重要事にまつわる場所への礼拝行為として
- 免罪のプロセスとして
- 病気の治癒を願って祈るため
- 宗教指導者との信仰者集会に参加するため
- 宗教上の祭典や儀式を目撃するため
- 家族の宗教行事のため
- 未来に奇蹟が起こりうる場所に行くため

Devereux and Carnegie（2006）は、巡礼ツーリストの特徴として、次のものを加えている。「非物質的な生活への憧れ」、「利他的行為の意識」（たとえば、他人を助けること）、そして、「しばしば、精神的到達点へむけて苦痛を耐えようとする意志」の三つである。

巡礼行為は、宗教的なものと精神的なものとの境界が曖昧であることを明かす。Heelas and Woodhead（2005）は、非宗教的な精神性が伝統的宗教よりも優勢になる精神上の革命が、徐々にではあるが確実に進行していることを明らかにしている。フロイトのように、西洋の心理学者の中には、宗教が個人の精神衛生にとって有害であると信じた者もいる。逆に、ユングのように、精神性こそが人間にとって重要なものの本質であると信じた者もいる。実際、'spirituality'という語は、ラテン語の'spiritualitas'に由来した抽象語であり、「息」や「生命の本質」の意味するギリシア語の'pneuma'と同類の語である。全体観的健康（holistic and wellness）研究において、「健康の環」（'wheels of wellness'）（生活における諸活動の理想的なバランスを意味する）についての議論を展開している研究者たちがおり、中には、その中心に精神性を据えている者もいる（たとえば、Myers, Sweeney and Witmer, 2000）。精神性[についての研究]は、「文字通り宗教的なものの探査」に限られない全体観的な学問であり、あらゆる精神的な経験、すなわち、「心理学的、肉体的、歴史的、政治的、美的、知的等々、人間の精神的経験に関する主題の諸次元」を考察するものである（Schneiders, 1989: 693）。Davie（1994）は、精神性を「所属することなく信じること」だと述べており、これは、個人主義的な社会に適した言い方であると考えられる。社会学的研究は、個人主義的な文化・社会になっていくにしたがって、社会的疎外が進行し、精神的慰めへの需要が高まることになることを明かしている。

Magyar（2008）は、精神的・旅行者向けの主

要なウェブサイトからの情報を集め、世界中の人気の精神的スポットをリスト化した。

- イェルサレム (イスラエル)
- メッカ (サウジアラビア)
- ヴァチカンとローマ (イタリア)
- チベット、ネパールおよびエヴェレスト
- ゴアとベナレス (インド)
- マチュピチュ (ペルー)
- エジプト
- 富士山 (日本)
- ナバホ居留地 (アメリカ)
- リオデジャネイロ (ブラジル)
- アラスカ (アメリカ)

このリストの中には、たとえばアラスカのように、なぜ含まれているのかと驚きを与えるものもあるだろう。アラスカの場合、主に手つかずの自然と精神的雰囲気や理由に訪問するだろうからだ (*訳注4)。しかし、多くの非宗教的ツーリストにとって、精神性は、宗教的な場所以外にも見出せるものであることを明かしているのだ (たとえば、自然や風景に)。

Cohen (1996) は、「精神的中心」 ('spiritual center') を追い求めることが、とりわけ社会的に疎外されていると感じる人々にとって、ツーリズムの不可欠な部分であると述べた。精神的静修という伝統的側面は、宗教的ツーリストの巡礼という形態においてよく見られるものだ (Carrasco, 1996; Devereux and Carnegie, 2006)。けれども、非宗教的なツーリストは、別の形態の精神的教化を追い求めるだろう。精神的ツーリズムには、宗教的な場所や建造物、精神的風景、巡礼の中心地、アーシュラム (*訳注5)、隠遁所、グルを訪問することが含まれる。精神的な探求は、特定の宗教的探求よりも抽象的なものと捉えられ、体、心、精神のバランスに焦点を当てたもの一般のことを指す。ツーリストは、意味、関わり、平穏を多様な

活動、たとえば瞑想、詠唱、呼吸を通じて追い求める。これらの伝統の中には、宗教的実践に由来するものもあるだろうが、一つの信仰にのみ関係するものというより、雑種的なものとも言えるだろう (たとえば、仏教の瞑想にヒンドゥーのマントラや中国の武道を結合するような)。

Cohen (1996) は、ツーリストの動機と経験を

気晴らし的、レクリエーション的、経験的、体験的、実存的の五つのカテゴリーに分けている。前三者は、主として日常、退屈、疎外から逃れるもので、必ずしも他所の意味を《見つけ出す》 (*find*) ことを求めるわけではない。対照的に、ツーリストは、それぞれの場所に別様の精神的中心を探し求め、自分自身を見つけて出すために、「真正の」 ('authentic') 生活や日常的行為との実例比較を行うのだ。これは、若者をはじめ「ポストモダンの旅行者」に多く見られることで、一定の期間、アーシュラムやキブツにたむろするのであるが、さらに、1960年代から70年代にかけての、年をとっても戻ろうとはしなかったヒッピーたち、あるいは、30歳から50歳ぐらいで燃え尽き、社会復帰しようとしているベテランたちも含まれる。対して、実存的旅行者は、一つの精神的中心に深く関わる傾向にあり、その場所に半永久的に住み続けるか、いわば個人的巡礼として定期的に訪れるのだ。

典型的な宗教的ツーリストと精神的ツーリストの特質を要約すると、次のような対照をなしている。

宗教的ツーリスト	精神的ツーリスト
<ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の宗教または宗教団体に入会している ・ 宗教的教化を求めることに関心がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「一つの信仰に限らない」共感を抱く傾向にある。 ・ 個人の精神的発展に関心がある

<ul style="list-style-type: none"> ・ 特定の宗教的場所や風景を訪れることを享受する ・ 他の宗教的ツーリストや巡礼者、地元のコミュニティに対し共感を抱く ・ 儀式的行動に従事する ・ 最終的に、宗教的一体化や救済を追い求める 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 精神的・神秘的風景を訪れることを享受する ・ 地元や原住民のコミュニティとの交流を追い求める ・ 儀式やセレモニーに参加することもある ・ 体、心、精神の調和を望む
--	---

このように、宗教的ツーリズムと精神的ツーリズムは活動という観点からすれば密接に結びついているが、動機が大きく異なるのである。精神的教化に寄与する旅は、ツーリズムにおいて長い歴史をもつものであるが、ポストモダン社会において、動機が、非宗教的な性質を帯びたものになってきたと言えるだろう。

【関連項目】ヘルス・健康ツーリズム

【読書案内】

宗教や精神性に関しては、多くの書籍があるが、ツーリズムに焦点をあてたものは数点である。たとえば、Fernandes et al.の *Religious Tourism and Pilgrimage*、Olsen and Timothy の *Tourism, Religion and Spiritual Journeys*、Raj and Morpeth の *Religious Tourism and Pilgrimage Management: An International Perspective* が挙げられる。最近の研究の多くは、一つの信仰に限らない非宗教的な精神性を強調する傾向にあり、キリスト教の遺産に焦点をあてる伝統的なスタイルと異なっていることには注目してよい。

【推薦図書】

Fernandes, C., McGettigan, F. and Edwards, J. (2003) *Religious Tourism and Pilgrimage*. Tilburg: ATLAS.

Olsen, D.H. and Timothy, D.J. (eds) (2006)

Tourism, Religion and Spiritual Journeys. London: Routledge.

Raj, R. and Morpeth, N.D. (eds) (2007) *Religious Tourism and Pilgrimage Management: An International Perspective*. Wallingford: CABI.

(訳注1) 1986年にローマ教皇の提唱で、アッシジにおいて「世界平和の祈りの集い」という、それまでにない(すきま(niche)だった)宗教間対話の試みがなされたことを指していると思われる。

(訳注2) liminal stateあるいはliminalityはターナーの用語で、日常の規範から離れることで人間が不確定な状態に置かれることを指す。巡礼者のほかに、道化など。

(訳注3) 同じくターナーの用語で、非日常的な社会状態のことを指す。カーニヴァルのときに一時的に成立する共同状態など。

(訳注4) ミスリーディングだが、前の文の冒頭に「いわゆる宗教的な場所のみを精神的な場所と捉えるならば」を補って読めばよい。

(訳注5) ashrams はヒンドゥーの隠遁僧院のことだが、転じてヒッピーのコミュニオンを指す場合がある。そのことを念頭に、以下も「アーシュラム」と表記する。

【伊多波】

【ルーラル・ツーリズム (Rural Tourism)】

ルーラル・ツーリズム(*訳注1)は、田園地方で行われるツーリズム活動の諸形態を指し、地元の文化、伝統、産業や、損なわれていない田園環境で開催される野外活動や体験などを包含する。地元のコミュニティは、ルーラル・ツーリズム商品の提供に重要な役割を果たす。

ルーラル・ツーリズムは、ロマン派に想を得て旅行者が特にアルプスや湖水地方に田園の静養地を求めた18世紀末以来、ヨーロッパ全域でずっと人気がある。しかし、ルーラル・ツーリズムが真価を発揮したのは20世紀末である。その理由は、(a)海岸が豊富でない地域で都市や都会的環境が

らの脱出の需要が生まれ、(b)統合の進展や、地理的国境や辺境の再定義の結果、アイデンティティや民族的な違いを確認する必要を人々が感じたからである。ルーラル・ツーリズムそのものは、国際的な移動とは限らず、むしろ国内のレジャーであり、自らのルーツを探そうとする国民的なツーリズムである。これは、生活の質を高め、自然やよい食事、健康と接しようとする、ある種のノスタルジア・ツーリズムであるとも見ることができる。

ルーラル・ツーリズム体験の国内的な性質に呼応し、英国田園庁は 2011 年に、英国の田園地方(countryside)で旅行者は 120 億ポンドを支出しており、イングランドのイギリス人が取得した全休暇のうち 1 / 4 は田園地方においてであったと報告している。しかし、同じ報告書は、田舎のイメージは海外の来訪者をひきつける非常に重要なツールとなっていると続けて指摘している(Countryside Agency/ ETC, 2001)。

ルーラル・ツーリズムは、必ずしもエコツーリズムと同じではないし、しばしば互換的に使われるが、農業(agricultural)ツーリズム、アグリツーリズム(agro-tourism)とも同じではない。ルーラル・ツーリズムの団体はエコツーリズムや農業ツーリズムとは明らかに異なる。エコツーリズムを批判する人々は、エコツーリズムが広報、マーケティング、生態学的な価値の認識に密接な関係があると感じている(エコツーリズム参照)。「グリーン」ツーリズム休暇を取得する人々は、彼らの原則やライフスタイルについて発言している。ルーラル・ツーリズムの旅に出かける人々はよい食べ物、よい散策、平穏と静寂を求める以上のことを必ずしもしていない。「エコラベル」、環境税、エコツーリズムは概して政治的な立場や、持続可能な経済便益のための「グリーン」(*訳注2)で生態学的な価値の推奨を象徴する。一方、農場での労働休暇は、「深い」エコロジストの立場—すなわち、都会とは対照的な田舎の労働リズムへの熱中を象

徴する。それは、「環境」(environment)を変えるに反映されるだけの余暇の側面である。しかし、ルーラル・ツーリズムは、まったく異なる余暇商品である。それは、騒音公害(acoustic pollution)のないこと、自然や食文化の価値、伝統的な趣味や手工芸品、スローフードとの接触やくつろいだ生活ペースなどと関連している。それは、言い換えれば、都会生活とは全くの正反対のものである。そのため、ルーラル・ツーリズムは、個人的で孤立した都会生活の正反対のものとしてコミュニティ・ツーリズム(community tourism)の概念と密接なつながりがある。視覚汚染(visual contamination)、聴覚汚染(acoustic contamination)がないことが、損なわれていない(「環境」という語の可能な限り幅広い意味における)環境や、伝統的な建物とともに、ルーラル・ツーリズム事業の成功には絶対不可欠である。他者との交流も、ルーラル・ツーリズムやコミュニティに基盤をおくツーリズム(community-based tourism)(*訳注3)での体験の中心である。

Page ほか(2001)は、ルーラル・ツーリズムには、人里離れた場所での平穏、静けさ、孤独など、さまざまな特徴があると示唆している。旅行者が、地元コミュニティの景観、野生動物、文化、ライフスタイルに惹きつけられ、都会生活を逃れ、新鮮な空気を楽しみたいというのはよくあることだ。冒険や挑戦を通して健康や体力を改善したいという動機もあるだろう。

ルーラル・ツーリズムでの大半の手工芸品や活動は女性が支配しているので、ルーラル・ツーリズムは女性のエンパワーメントの概念と関連する。都会の主要なレストランやケータリングビジネスとは反対に、田舎地域では美食は一般的に女性が支配する活動であり、ルーラル・ツーリズムでは特にそうである。そう考えると、ルーラル・ツーリズムは、おそらく、ステークホルダーが直接ツーリズム商品の形成、実行、そこから生まれる利益に関わる最も効果的な例であろう。そうし

たものであるから、ルーラル・ツーリズムは、コミュニティ・ツーリズムや貧困克服のためのツーリズム (pro-poor tourism) ^(*訳注4)、**倫理的ツーリズム**の基礎となりやすい。

視覚汚染のなさや、快適さの基本と考えられるある程度のインフラが必要とされているということは、余暇滞在を可能な限り気持ち良いものにするために必要な給排水システムなど基本的な快適さを提供するために、新たな農村・コミュニティ計画の中で代替的エネルギーやクリーンエネルギーシステムをもっと利用してよいということを意味する。これもまた、ツーリズムを使って、エネルギーや給水システムがない地域にそれらを導入し正の便益や影響をもたらせるという例である。ルーラル・ツーリズムは、他の活動と同様、それが提供される場所によって異なる。都市生活が大半の人々の平均的な暮らしであり、人口の高齢化が進んでいるヨーロッパでは、ルーラル・ツーリズムは、高級なツーリズムのスタイルであり、日常生活からの脱出を象徴している。それゆえ、ワイン・ツーリズムや**美食ツーリズム** (gastronomic tourism)、**健康・ウェルネス・ツーリズム** (health and wellness tourism)、冒険ツーリズムと密接に関連して展開している。しかし、ヨーロッパ以外の、経済構造が依然として農村中心の地域では、ルーラル・ツーリズムは、地元の人々と接し、短期間コミュニティに「所属する」という独特の機会を提供している。ルーラル・ツーリズムがコミュニティの合意のもとでコミュニティに基礎を置いてデザインされれば、物理的、文化的な居住環境の保護も可能になる。

ブルントラント報告 ^(*訳注5) で奨励された、第3世界の貧困軽減と経済成長促進のためにデザインされたツーリズムの概念は、かなりの程度、こうした内容であった。1992年にリオデジャネイロで開催された地球サミット ^(*訳注6) で作られたアジェンダ 21は、ツーリズムを通して持続可能な開発に向かうためにデザインされた行動計画だった。

そのためのツーリズムは、コミュニティレベルでの環境的な商品に基礎を置き、制度的な開発計画の大半がもつヒエラルキー的なトップ・ダウンのアプローチとは反対に、ボトムアップのアプローチで生まれるとされた。

Shackley(1996)は、ツーリズムに対するこれらの新たなアプローチについて次のようにコメントしている。

環境に優しいツーリズム、持続可能なツーリズム、エコツーリズム、責任あるツーリズム、低インパクトのツーリズムなどの用語は、一般に使われている多数の用語のいくつかである。これらの用語は、(ツーリストを迎え入れる) 目的地の地域に何らかの形で持続的な利益をもたらす低インパクトのツーリズムを指している。(Shackley, 1996: 12)。

ルーラル・ツーリズムは消費者と提供者の双方に便益をもたらすが、その一方で、ルーラル・ツーリズム商品の開発と経営には無数の課題が内在している。Pageほか(2001)は、そうした課題はルーラル・ツーリズムの経済的・市場的価値を確立するための研究を行う難しさに関連しているのだろうと示唆している。田舎のコミュニティは社会人口的な様相が場所ごとに非常に異なっている場合が多く、それゆえにツーリズムへの対応も異なるだろうからである。ツーリズム開発は、すべての地域に適するものではないのだろう。来訪者にとっての魅力を維持するために自然・文化環境の質を管理するのは難しい。

ルーラル・ツーリズムが開発される前に、田舎の地域やコミュニティが理解される必要がある。田舎地域が来訪者にとって魅力的であることは明らかだし、ツーリズムが田舎の開発に有用な手段となるだろうことも明らかだ。しかし、ルーラル・ツーリズムが最も成功しているのは、それが強力な田園経済に組み込まれている場所である。

【関連項目】エコツーリズム、倫理的ツーリズム、持続可能なツーリズム

【読書案内】

Hall ほかの *New Directions in Rural Tourism* が読者には有用だろう。興味深い事例研究が Roberts の *Rural Tourism and Recreation: Principles to Practice* に収録されている。

【推薦図書】

Hall, C. M, Roberts, L and Mitchell, R. [eds] (2003) *New Directions in Rural Tourism*. Aldershot: Ashgate.

Roberts, L. [ed.] (2001) *Rural Tourism and Recreation: Principles to Practice*. Wallingford: CABI

Roberts, L. [ed.] (2004) *New Directions in Rural Tourism*. Wallingford: CABI.

(訳注1) 文字通りに訳せば「田舎ツーリズム」となる。呉羽正明は「ルーラル・ツーリズム」の訳を当てているが、文献案内に収録されている論文の題名では「グリーン・ツーリズム」を用いている場合が多い。したがって、日本では両者を概念的に厳密に区別することはほとんどなかったと見受けられる。[持続可能なツーリズム] の訳注5も参照されたい。

- ・呉羽正明(2011)「観光地理学研究」江口信清、藤巻正己編『観光研究レファレンスデータベース 日本編』ナカニシヤ出版、p. 17。同書の文献案内17(p. 223-230)も参照。

(訳注2) 「環境にやさしい」を意味する green の用法で、「green hotel グリーン・ホテル」などの用語がある。

(訳注3) [先住民ツーリズム] の訳注3参照。

(訳注4) 高寺奎一郎は「貧困克服のためのツーリズム」、江口信清は「プロブアー・ツーリズム」、藤巻正己は「貧困克服のための観光」の訳を当てている。

- ・高寺奎一郎(2004)『貧困克服のためのツーリズムー Pro・Poor Tourism』古今書院
- ・江口信清(2010)「社会的弱者と観光に関する研究」、江口信清、藤巻正己編『貧困の超克とツーリズム』明石書店、第1章、p. 21。

- ・藤巻正己(2011)「観光と政治」江口信清、藤巻正己編『観光研究レファレンスデータベース 日本編』ナカニシヤ出版、p. 120。同書の文献案内18(p. 231-232)も参照。

(訳注5) 1984年に国連に設置された「環境と開発に関する世界委員会(ブルントラント委員会)」が1987年に発行した最終報告書『我ら共有の未来』を指す。この報告書は「持続可能な開発」を「将来の盛大のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」と説明している。

- ・東京商工会議所編(2010)『改訂2版 環境社会検定試験 eco 検定公式テキスト』日本能率協会マネジメントセンター、p. 86

(訳注6) 「環境と開発に関する国連会議」。地球環境問題を人類共通の課題と位置づけ、地球環境保全と持続可能な開発の実現のための取り組みが採択された。その一つが「持続可能な開発のための人類の行動計画アジェンダ21」である。

【小槻】

【持続可能なツーリズム (Sustainable Tourism)】

持続可能なツーリズムは、持続可能な開発の概念をツーリズム産業に適用し、経済的な継続性を維持する一方で、ホスト・コミュニティや環境への影響を可能な限り最小限に抑えたツーリズムを目指す。

過去20年間に、ツーリズムが目的地の環境、経済、文化にもたらす影響についての認識が高まり、ツーリズム・マネジメントの理論および実践として持続可能なツーリズム (sustainable tourism) (*訳注1) が発展してきた。持続可能なツーリズムは、ツーリズムの負の影響に関心があり、その点で倫理的ツーリズム(ethical tourism)やエコツーリズム(ecotourism)と強い関連がある。

持続可能なツーリズムの概念は、より広い「持続可能な開発」の概念に由来する。持続可能な開

発は環境に人類がもたらす影響についての懸念の増大を反映している。持続可能性という概念は、対立する2つの観点を持っている。すなわち人間中心の観点と環境中心の観点である。人間中心の立場は、人間を地球上の支配者と見て、自然は人間の利益のために利用されるものとみなす。反対に、環境中心の見方では、人類の進歩よりも自然環境の質の方が重要であるとする。この両極の間に広がる連続体の上で視点は変動するので、持続可能性についても、非常に弱い、弱い、強い、非常に強いといった立場が存在する (Turner et al., 1994)。

持続可能な開発に対する国際社会の関心が最初に顕著となったのは、1960年代である。この時期経済開発と社会開発のバランスに関する懸念が明確に示されつつあった。1980年代半ばに、この問題について討議するため数多くの国際会議が開催され、1984年に国際連合は「環境と開発に関する世界委員会」(*訳注2)を任命し、1987年には『我ら共有の未来』と題する報告書が発表された。この報告書に、持続可能な開発に関する最も広く引用される定義を見出せる。すなわち「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく今日の世代のニーズを満たすような開発」[UNWCED, 1987]である。それゆえ持続可能な開発は、経済開発を続けることはできるが、資源を保全しながら行わなければならないとする。さらなる国際的な出来事が地球規模での行動を促進するうえで重要だった。1992年にリオデジャネイロで開催された国連地球サミット(*訳注3)は、持続可能な開発のための国際的な青写真を発表した。『アジェンダ 21』と題されたこの行動計画は182か国の首脳によって署名され、国レベル、地方公共団体レベルで実行されている[UNCED, 1992]。ツーリズムはアジェンダ 21の主要素としては取り上げられなかったが、多くの地域政府、地方公共団体がそのツーリズムの開発や運営にこれらの原則を成功裏に適用した。

今日のわれわれには明らかに思えようが、ツーリズムは、自然的、文化的、人的資源を使う産業として、持続可能な開発に向けた地球規模の努力の一部となるべきなのだが、ツーリズムに対するこうしたアプローチは、第二次世界大戦後の国際ツーリズムの展開以来、徐々に姿を現してきた。Jafari (2001)はこの展開を、擁護プラットフォーム、警告プラットフォーム、適応プラットフォーム、知識基盤プラットフォームという4つの連続するプラットフォーム、すなわちツーリズム産業に対する視点として説明する。これらは、Jafari (2001)とWeaver (2006)にもとづいて、次のようにまとめることができる。

擁護プラットフォーム

1950年代及び60年代の発展しつつあるツーリズム産業に対する楽観主義や自信が反映されている。ツーリズムは税収や仕事の創出者、地域開発を刺激し、異文化間の理解と保全を促進する原動力とみなされていた。

警告プラットフォーム

1960年代末から1970年代初めに、より慎重なアプローチが出現し始める。規制されないツーリズム開発が問題を引き起こしつつあり、多くのツーリズムの仕事の特徴である季節性や低賃金が認識され、文化の商品化や紛争も明らかになり始めていた。

適応プラットフォーム

警告プラットフォームはツーリズムの負の影響を特定したが、解決策が議論されるようになったのは、1970年代及び1980年代初頭、適応プラットフォームの時代になってようやくであった。マスツーリズムに代わるものが推奨され、これらのオルタナティブ・ツーリズム(alternative tourism)(*訳注4)の形態は地域の社会文化的、環境的な文脈に適応すべきだと提案された。

知識基盤プラットフォーム

1980年代末及び1990年代になると、代替的なツ

ーリズム形態は部分的な解決に過ぎず、ツーリズム産業の管理にはより厳密な科学的アプローチが欠かせないことが明白になった。ツーリズム研究への資金が増え、大学レベルにツーリズム研究が導入され、ツーリズムに関する学術誌も急増した。

以上に示した4つのプラットフォーム、すなわち4つの見方からわかるように、1960年代からツーリズムの負の影響についての認識が高まってきた。これまでとは異なるツーリズム及びその開発の取り組みを表すために、さまざまな用語が取り入れられてきた。「グリーン・ツーリズム(green tourism)」^(*訳注5)、「ソフト・ツーリズム(soft tourism)」、「責任あるツーリズム(responsible tourism)」、「エコツーリズム(ecotourism)」、そしてもちろん「持続可能なツーリズム」である。これらの用語は、ツーリズム・マネジメントの文献の中では、依然として互換的に使われている。こうしたさまざまな専門用語とともに、持続可能なツーリズムの定義についても多数の紛らわしい定義が現れた。いまだに一般に受け入れられた定義は存在しない。しかし、2004年に世界観光機関(World Tourism Organization)が、ツーリズムの経済的、環境的、社会文化的側面を認識する基本諸原則を確立した。それによれば持続可能なツーリズムは、

- ・ 環境的資源の利用を最適化すべきである
- ・ ホスト・コミュニティの社会文化的真正性を尊重すべきである
- ・ すべての利害関係者に社会経済的な便益を提供し、実行可能な長期的な経済運営を保証すべきである

これらはツーリズム産業にとって便利な指針である。社会文化的な持続可能性や経済的な持続可能性は、より広く議論される環境問題の二の次とされることがよくあるだけに、世界観光機構(WTO)

がこれらに同等に注目したことは、心に留めておくことが重要である(Swarbrook, 1999)。ツーリズム産業が依存する資源を将来にも残すためにはツーリズムがより持続可能でなければならないという点は、今では、一般に受け入れられている。でも、持続可能なツーリズムの戦略を実践しようとすると多数の課題がある(倫理的ツーリズムも参照)。そうした課題は、ツーリズム産業にはさまざまな利害関係者がおり、実際に何が持続可能なツーリズムなのか、どのように監視できるのか、合意がない、という複雑性に起因している(Weaver, 2006)。ツーリズム産業の複雑な性格は、持続可能なツーリズムを実現するには、すべての利害関係者を参加させなければならないということの意味する。そこには、公共部門、ツーリズム産業、ホスト・コミュニティ、ボランティア部門、旅行者自身が含まれる。これらのグループの優先課題は異なり、多くの場合競合関係にあること、持続可能なツーリズムの概念に対する彼らの理解が大きくかけ離れていることは、明白である。

持続可能なツーリズムの定義、測定、監視^(*訳注6)について合意がないということは、持続可能なツーリズムは実現困難だということを意味する。それは、たとえ目的地やツーリズム産業の全部門の個々の運営で、次のような持続可能性を高めるためのさまざまな方法や手段が導入されても、同じなのだ。

*環境影響評価(Environmental Impact Assessment, EIA)*は、先進諸国で具体的な開発案件について計画段階と開発後の段階の両方で正負の影響を評価するのに使われている。環境影響評価は新たな開発案件の適切さについて意思決定をするには有用だが、大規模プロジェクトにのみ適用され、世界的には散発的に実施されているに過ぎない。

環境容量(carrying capacity)^(*訳注7)と許容できる変化の限界(LAC: The Limit of Acceptable

Change)^(*訳注8)はどちらも、ある目的地でのツーリズム活動を制限する方法である。環境容量は、目的地の社会的、生態学的、経済的能力の指標とみることができる。LACは環境容量の概念を基礎に作られたが、限界は固定値ではなく、より柔軟なもので、ツーリズムが引き起こす変化が目的地で許容される量と類型を定めるものである。

*利用者管理(Visitor Management)*とゾーニング(*Zoning*)^(*訳注9)は、利用者とサイトへの潜在的なインパクトを管理することで、持続可能性を高めるのが目的の手段である。利用者管理は、利用者数を規制し、利用者の行動を改めさせ、目的地の回復力を増すように順応させることを目的としている。ゾーニングはサイトの利用者間で生じうる紛争に取り組み利用者管理に寄与する。レクリエーション利用区域と保護区域を指定することで、利用者のニーズと環境のニーズに折り合いをつけることができる。

こうした目的地内での持続可能性への取り組みに加え、ツーリズム産業内の多くの企業が、グリーン(green)な資質を明示するために、さまざまな戦略、政策、構想を発展させてきた。以下の3つはその好例である。

英国航空は、1990年以來毎年社会環境報告を公表している。英国航空は二酸化炭素排出量、騒音公害、水消費量を減らす努力をし、世界中で保全活動に資金を提供している。

グレコテル(*Grecotel*)は、エーゲ諸島に16か所の豪華ホテル、リゾートを展開するホテルチェーンである。1981年の創業以来、廃棄物と水消費量を減らす、土地固有の建築様式でホテルをデザインする、地元の産品を利用する、保全プロジェクトに資金を提供するなど、多数の環境に関する取り組みを開拓してきた。

持続可能なツーリズム開発のためのツアー・オ

ペレーター・イニシアティブは、利用者とサイトへの潜在的なインパクトを管理することで、持続可能性を高めるのが目的の手段である。利用者管理は、利用者数を規制し、利用者の行動を改めさせ、目的地の回復力を増すように順応させることを目的としている。ゾーニングはサイトの利用者間で生じうる紛争に取り組み利用者管理に寄与する。レクリエーション利用区域と保護区域を指定することで、利用者のニーズと環境のニーズに折り合いをつけることができる。

真に持続可能なツーリズム産業が実現する可能性に慎重だが、ツーリズム産業内でより責任ある取り組みが進むのは、どんな動きでも歓迎されている。持続可能なツーリズムが実現するためには、それが特殊な型のツーリズム商品や事業慣行ではなく、ツーリズム産業内のすべての利害関係者に伝えるべき精神(ethos)として理解されるべきである。

【関連項目】エコツーリズム、倫理的ツーリズム、持続可能なツーリズム

【読書案内】

Weaver の 2006 年の *Sustainable Tourism: Theory and Practice* はこの研究分野の有用な入門書である。David Edgell の 2006 年の *Managing Sustainable Tourism: A Legacy for the Future* も同様である。『持続可能なツーリズム年報』(*Journal of Sustainable Tourism*)は関連論文の貴重な資料となるだろう。

【推薦図書】

Edgell, D. (2006) *Managing Sustainable Tourism: A Legacy for the Future*. New York: Haworth.

Swarbrooke, J. (1999) *Sustainable Tourism Management*. Wallingford: CABI

Weaver, D. (2006) *Sustainable Tourism: Theory and Practice*. Oxford: Butterworth-Heinemann.

2月23日アクセス)

(訳注1) 峯俊智穂は「持続可能な観光」と訳している。

- ・峯俊智穂(2011)「ヘリテージ・ツーリズム」江口信清、藤巻正己編『観光研究レファレンスデータベース 日本編』ナカニシヤ出版、p.120。

(訳注2) [ルールル・ツーリズム] 訳注5参照

(訳注3) [ルールル・ツーリズム] 訳注6参照

(訳注4) 長谷編『観光学辞典』では玉村和彦が「オルタナティブ・ツーリズム」、香川編『観光学大事典』では安村克己や太田源三が「オルタナティブ・ツーリズム」の訳をあてている。

(訳注5) 「グリーン・ツーリズム」は日本では、山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動を指して使われるが、ヨーロッパでは違う意味で使われていると加藤由紀子が次の通り指摘している。「日本では(補注:ルールル・ツーリズムが)グリーン・ツーリズムと同義で使われることもあるが、ヨーロッパでは、環境保全意識の強い「グリーン・ツーリズム」がルールル・ツーリズムの発展形として使われることが多い(加藤由紀子「ルールル・ツーリズム」香川編『観光学大事典』p.27)

(訳注6) 「モニタリング」の訳も多い

(訳注7) 長谷編『観光学辞典』では朝水宗彦が「環境容量あるいはキャリングキャパシティ」と訳し「自然環境には負荷に対して回復する能力があり環境が回復可能な範囲のことを環境容量あるいはキャリングキャパシティと呼ぶ」と説明している(長谷編p.244)。香川編『観光学大事典』では古本泰之が「環境容量」の訳語を当てている(「資源保護・海外での事例」香川編p.109)しかし、小林英俊は「適正収容力(キャリング・キャパシティ)」、知床エコツーリズム推進計画では「受け入れ許容量」、阿曾村・鏡は「収容能力」と訳している。

- ・スー・ビートン、小林英俊訳(2002)『エコツーリズム教本—先進国オーストラリアに学ぶ実践ガイド』平凡社、p.115。
- ・ポール・F・J・イーグルズ他、小林英俊訳(2005)『自然保護とサステイナブル・ツーリズム—実践ガイドライン』平凡社、p.166。
- ・知床エコツーリズム推進協議会(2005)『知床エコツーリズム推進計画』URL: http://shiretoko-eco.net/modules/pico1/content/eco_pdf/plan.pdf (2012年

- ・D. J. テルファー、R. シャープリー(阿曾村邦昭、鏡武訳)(2011)『発展途上世界の観光と開発』古今書院、p.280。

(訳注8) 小林英俊は「変化の許容限界設定プログラム」、知床エコツーリズム推進計画では「変化許容量」、曾宇良は「許容できる変化の限界」、鈴木晃志郎は「変化の許容限界」、阿曾村・鏡は「受け入れられる変化の限界」と訳している。なお、資源保全学では「許容限界」と訳すようである。

- ・前掲 ポール・F・J・イーグルズ他、小林英俊訳(2005)、p.167-175。
- ・前掲 知床エコツーリズム推進協議会(2005)
- ・曾宇良・飯田繁(2005)「自然公園におけるレクリエーションインパクトの評価と管理対策に関する研究—墾丁国家公園を事例に—」九大演報、86、pp.85-99
- ・鈴木晃志郎(2009)「世界遺産登録に向けた小笠原の自然環境の現状」『小笠原研究年報』(首都大学東京小笠原研究委員会)(32)、pp.27-47。
- ・前掲 D. J. テルファー、R. シャープリー(2011)、p.280。

(訳注9) ポール・F・J・イーグルズ他、小林英俊訳(2005)『自然保護とサステイナブル・ツーリズム—実践ガイドライン』平凡社、p.197-202。

【小槻】